



京都北部の中世社会

基調報告

考古資料からみた丹後の中世社会

京都府立丹後郷土資料館

資料課長 森島 康雄 P 1 ~ P 8

事例報告 (1)

大川遺跡の調査成果について

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査員 綾部 侑真 P 9 ~ P 24

事例報告 (2)

戦国時代の舞鶴と中山城を考える

～中山城発掘調査を踏まえて～

京都府立東舞鶴高等学校

教諭 廣瀬 邦彦 P25 ~ P35

日時：平成 28 年 6 月 4 日 (土) 午後 1 時 30 分～ 4 時 30 分

場所：舞鶴市西総合会館 4 階 第 1 会議室

主催：京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

共催：舞鶴市教育委員会

考古資料からみた丹後の中世社会

京都府立丹後郷土資料館
資料課長 森島 康雄

はじめに

平清盛^{たいらのきよもり}による平氏政権の成立から豊臣秀吉による天下統一までを中世と呼んでいます。この時代は武家政権が成立して政治権力が分散化し、荘園^{しょうえん}などの土地支配や人々の支配・従属関係も重層化した時代でした。この萌芽は、白河法皇^{しろかわ}による院政が始まった11世紀後半に現れますので、院政期は中世初期と考えることができるでしょう。また、中世は南北朝の騒乱を境に中世前期と中世後期に区分することが出来ます。

本日は、丹後地域の遺跡を中心に、由良川流域も視野に入れながら、居館と城、墳墓と経塚^{きょうづか}、土器・陶磁器と銭貨^{せんか}の観点から、丹後の中世社会の特徴を概観してゆきます。

1. 居館と城

武士の台頭とともに、四方を堀や溝に囲まれた方形居館^{ほうけいきょかん}が各地に作られるようになりますが、丹後地域では明瞭な遺構は見つかっていません。

福知山市川北に所在する上ヶ市^{うわがいち}遺跡は、由良川中流沿岸の比高差10mほどの河岸段丘上^{かがんだんきゅう}に立地する遺跡です。段丘面の続く北と西を幅4.2m、深さ1.2mの堀で区画した段丘先端部の南北180m、東西130mの範囲に、50m四方程度の小区画が4つあったと考えられ、発掘された3つの区画内にはそれぞれ数棟の掘立柱建物^{ほったてばしらたてもの}が建ち並びます。この遺跡は平安時代末の12世紀後半に成立しますが、13世紀代の初頭に廃絶するようです。

丹後では、京丹后市網野町の網野銚子山古墳^{あみのちょうしやま}にほど近い大將軍遺跡^{だいじょうご}が、これに類似する可能性のある遺跡です。遺跡が立地するのは海岸段丘の先端部で、幅2.7~3.3m、深さ0.5~0.7mの箱堀状^{はこほり}の大溝の直角に曲がる部分が見つかって、出土遺物から中世の遺構とされています。この溝に区画されるであろう内部は調査区外にあたるため、遺構の内容はわかりませんが、段丘先端部に幅の広い堀状の遺構で区画される遺跡の在り方は共通しています。

京都府南部では、久世郡久御山町の佐山遺跡^{さやま}や長岡京市の下海印寺遺跡^{しもかいいんじ}などで11世紀後半に成立する巨大な堀に囲まれた大規模な居館が見つっていますが、これらは全国的に見ても早い時期の中世居館です。

これらの中世居館を営んだのは、荘園を寄進して荘官^{しょうかん}の地位を得た開発領主もしくは荘

園領主が現地に派遣した^{しょうかん}荘官と考えられ、^{きしんちけいしやうえん}寄進地系荘園の盛行とともに現れる遺跡といふことができます。佐山遺跡は^{いwashimizuはちまんぐうこくらくじ}石清水八幡宮極楽寺領の「居屋狭山」（『石清水八幡宮文書』保元3（1158）年）の荘官の居館、上ヶ市遺跡は天田郡前貫首丹波兼定が先祖相伝の私領を松尾大社に寄進して成立した^{ささいべ}雀部荘（『松尾大社東家文書』寛治5（1091）年）の一面にあたることから、雀部荘の在地領主層の居館が営まれた可能性が考えられます。

上ヶ市遺跡が営まれた平安時代末頃になると、2～3軒の建物を単位に散在する形であった村が、家々が寄り集まって営まれる集村の形に変化します。丹後の中世集落遺跡としては、^{かじ}鍛冶工房跡や掘立柱建物群が発見された京丹後市久美浜町の^{べっそう}別荘遺跡、河道から大量の土器や木器・鍛冶関連遺物が出土した京丹後市網野町の^{あさこだにみなみ}浅後谷南遺跡、建物跡は不明瞭ながら多量の^{はじき}土師器皿や箸が出土した京丹後市大宮町の^{おきた}沖田遺跡、井戸跡などから良好な資料が出土した与謝野町^{かなやさくらうち}金屋桜内遺跡などがあります。これらの集落はいずれも平安時代末頃に成立しますが、この動向は、大きな親族集団である「^{うじ}氏」から、直系家族である「^け家」が成立してゆくこの時代の社会変化を反映したものと考えることができます。

一般に、中世の居館を集落との関係でとらえると、①複数の屋敷地からなる集落全体を囲む環濠の中に、相対的に規模が大きくて中心的な居館が見られるもの、②堀で囲まれた集落の中に堀で囲まれた居館が造られる2重構造のもの、③集落の一角に堀で囲まれた居館があるもの、④堀で囲まれた居館が接続して集落を形成するものなどがあり、これらの違いは、突出した有力者がいるかどうか、有力者が在地のものかどうか、用水をどこから得ているかなどによると考えられます。丹後地域では中世集落と居館の関係が明瞭にわかる調査事例はありません。上ヶ市遺跡の場合は①のタイプになるものと思われる。

中世前期の居館は、堀や溝で囲まれるなど一定の防御機能を備えているものもみられますが、南北朝時代以降には堀と^{どるい}土塁で防御機能を高めるようになります。福知山市の^{おおうち}大内城跡は、平安時代末期から鎌倉時代には、柵で囲まれた区画に5～6棟の掘立柱建物が建つ居館で、^{むとべ}六人部荘を管理する荘官の居館と考えられますが、南北朝時代になると、居館の機能はなくなり、^{からぼり}空堀と土塁で区画された城へと変質します。丹後では、^{ろくはらたんだい}六波羅探題の^{こけにんくまがいなおひさ}御家人熊谷直久が^{こだいこ}後醍醐天皇の命を受けて丹後に兵を進め、熊野郡から与謝郡にかけての11か所の城を次々と攻略した様子が^{ぐんちゆうじやう}軍忠状に記されていますが、史料に現れるこれらの城に該当する遺構を特定することは困難です。

丹後地域では、京丹後市弥栄町のシミズ谷城跡、京丹後市大宮町の^{いくさか}幾坂城跡、宮津市の^{いまくまの}今熊野城跡・^{あみだがみね}阿弥陀ヶ峰城跡、舞鶴市の^{なかやま}中山城跡・^{おおまた}大俣城跡などで発掘調査が行われています。このうち15世紀後半に遡るものはシミズ谷城跡のみで、その他は16世紀後半に使われた城です。城跡のほぼ全体が調査された大俣城跡は、1580年頃に廃絶した城で、明智・

細川による丹後攻略の過程で使われたことが想定されます。丹後地域には、400以上もの中世城館遺跡が確認されています。その内容は、山城が極めて多く、平地城館の少ないことが特徴的で、旧山城国に平地城館が多くて山城が少ないことと対照的です。この違いは、「国衆」などと呼ばれる土豪層が合議で地域支配を行なうことが多く、有力な戦国大名が育たなかった旧山城国との違いが表れたものです。

発掘調査の行われていない山城の時期を決めることは難しいですが、多くは戦国時代の終わりごろに機能したものと思われます。

2. 墳墓と経塚

平安時代末頃から鎌倉時代にかけて、土師器皿や青磁椀などを副葬する土壙墓が集落遺跡の中に現れるようになります。京丹後市久美浜町の日光寺遺跡、京丹後市大宮町の松田遺跡、京丹後市丹後町の竹野遺跡、舞鶴市の志高遺跡などに例があります。これらのいくつかは、屋敷地の一面に営まれた屋敷墓と呼ばれるものの可能性があります。屋敷墓は、新たに成立した「家」の始祖の墓と考えられます。

これらは土葬墓ですが、一方で、この頃から火葬墓が現れます(火葬による埋葬は奈良時代に一部で行われていましたが、その後断絶していました)。中世集団墓地遺跡として有名な与謝野町の地蔵山遺跡の早い段階に営まれた塚墓にも火葬骨が埋葬されています。

そして、鎌倉時代後半になると、集団墓地が成立します。地蔵山遺跡のほか、京丹後市久美浜町の山形古墓群、京丹後市大宮町の水戸谷遺跡、宮津市の成相寺古墓、与謝野町の福井遺跡などがその例です。また、京丹後市大宮町の阿婆田古墓では、火葬骨が満たされた常滑焼口壺が見つかりました。不時発見のため周辺の状況はよくわかりませんが、付近に五輪塔があったということなので、集団墓地の納骨壺と考えられます。時代が下がって墓地を営むことができる階層の裾が広がるに従って、小土坑に火葬骨を納めただけの簡素な火葬土坑墓も造られるようになります。

水戸谷遺跡では、墓地の造営に先立って経塚が営まれており、経塚造営を契機に集団墓地が成立するものと考えられます。経塚から竹製経筒に納められた経典が出土した福知山市の大道寺経塚・古墓群も同様です。この他、山形古墓群や舞鶴市の天台南谷遺跡でも墓地に経塚が造営されています。

経塚は本来、釈迦入滅後、正法・像法の時代を経て、仏法が正しく行われなくなる末法の世が来るとする末法思想に基づき、弥勒下生の時まで経典を伝えようとしたものです。日本では永承7(1052)年が末法元年と信じられており、藤原道長が寛弘4(1007)年に造営した奈良県の金峯山経塚を最初として全国に流行しました。ところが、中世初期(11

世紀末)には追善供養^{ついでんくよう}を目的とした経塚が現れ、平安時代末(12世紀後半)以降は経典の保存という本来の目的に加えて墓との結びつきを強めます。

京都府は全国的にみても多くの経塚が営まれた地域で、特に平安京周辺と丹後地域に集中しています。平安京周辺の経塚には鞍馬寺^{くらまでら}経塚や花背別所^{はなせべつしよ}経塚のように多彩な埋納品を伴う経塚がみられます。これらは平安京の貴族を願主として12世紀を中心に造営されました。一方、丹後地域を中心に、丹波北部・但馬の経塚は、鏡や短刀を埋納する例があるものの全体的に埋納品は乏しい傾向です。営まれる時期も平安時代末(12世紀後葉)からと、やや遅れます。

また、この地域には、地面に掘った縦穴の側面に穿った横穴に、経典を納めた土師器筒形容器を埋めるという独特の構造の経塚が多数分布します。京丹後市久美浜町の権現山遺跡^{ごんげんやま}・豊谷遺跡^{とよたに}、京丹後市大宮町の通り経塚^{とお}・左坂経塚^{ささか}、宮津市のエノク経塚、舞鶴市の天台南谷遺跡^{たかだやま}、福知山市の高田山遺跡などがその代表例です。この地域での経塚と墓との結びつきの強さから、これらの遺構を、主土坑を墓、横穴を土師器筒形容器に納めた経典の副葬施設とみる考えがあります。

3. 土器・陶磁器と銭貨

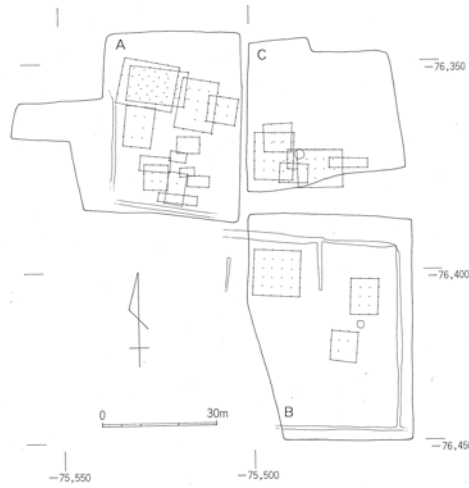
古代の土器は、いろいろな技法を組み合わせて法量の異なる多くの器種が製作されていましたが、中世の土器は、製作技法の簡略化と器種構成の単純化の達成に基づいて、規格化された少器種が各専門工人によって大量生産されていました。畿内では、供膳具^{きようぜんぐ}は瓦器^{がき}椀と手づくねの土師器皿、調理具・貯蔵具は、土釜類^{とうぼんけい}と東播系須恵器^{すえき}と常滑(知多)焼などの焼締陶器^{やきしめとうき}といった単純な器種構成による土器様式が中世初期に成立しました。丹後地域では、供膳具に丹後型黒色土器と回転台成形の土師器が加わり、調理具・貯蔵具は土鍋と東播系須恵器と丹波産の広義の東播系須恵器^{とうぼんけい}が加わり、焼締陶器が少ないといった違いがあるだけで、基本的には畿内と同様に単純な器種構成による土器様式に転換します。

これらの狭い地域で流通する土器に加えて、広域に流通する中国製の陶磁器や国産の焼締陶器が用いられます。中国製陶磁器は基本的には京都を介して入手したようで、丹後の地域的特色はほとんどありません。一方、国産の焼締陶器は、平安時代末にはほとんど常滑(知多)焼であることは他の地域と同じですが、鎌倉時代に越前産が増加し、南北朝時代からは丹波焼が増加することは特徴的です。越前焼と丹波焼の動向は生産地における生産量の変化とも整合的で、商品として生産されたものを生産地から直接入手していることが窺われます。

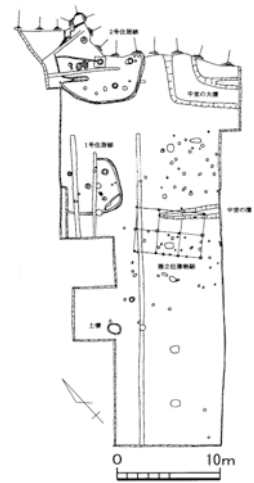
これらの変化は、貢納^{こうのうてき}的生産から商品的生産への変化であり、物流の観点から見れば領



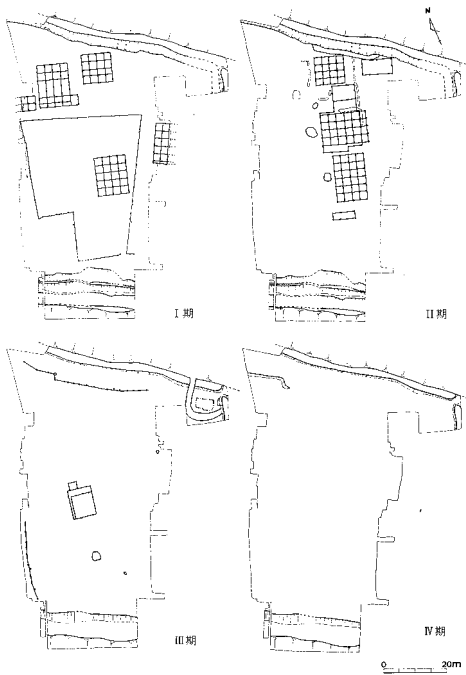
上ヶ市遺跡位置図



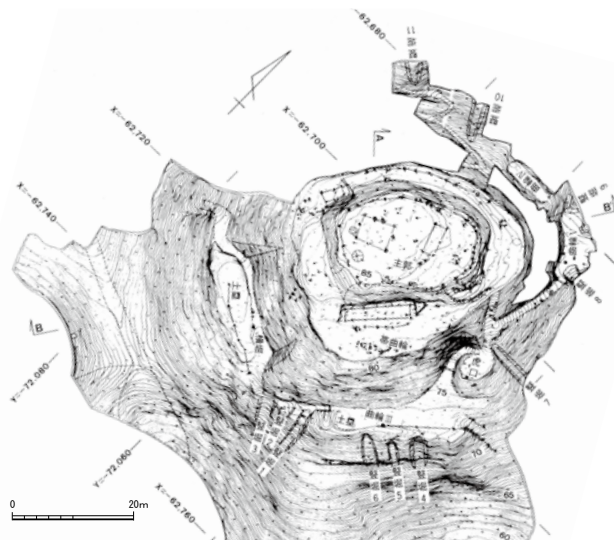
上ヶ市遺跡平面図



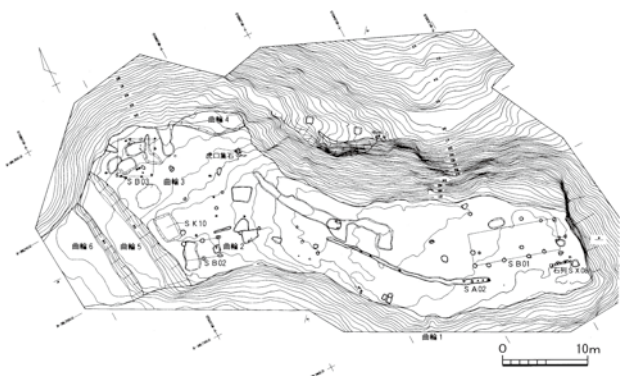
大將軍遺跡平面図



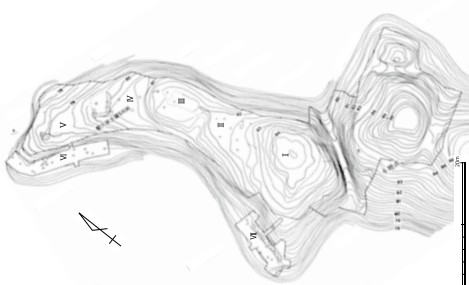
大内城跡遺構変遷図



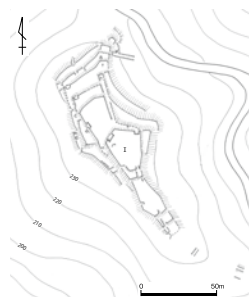
大保城跡縄張図



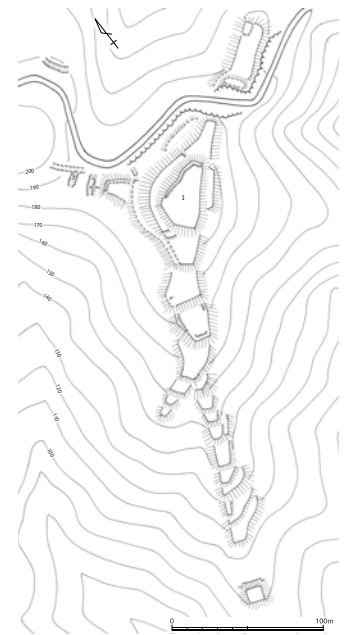
シミズ谷城跡縄張図



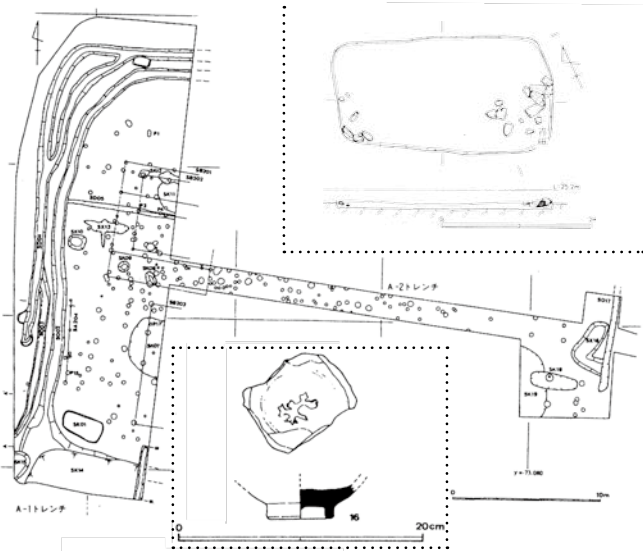
幾坂城跡縄張図



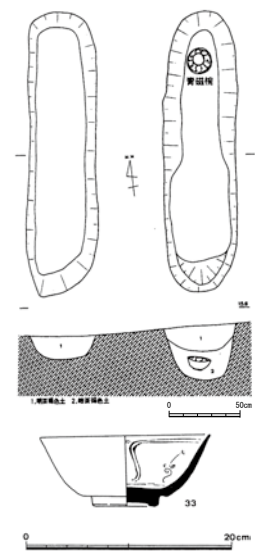
阿弥陀ヶ峰城跡縄張図



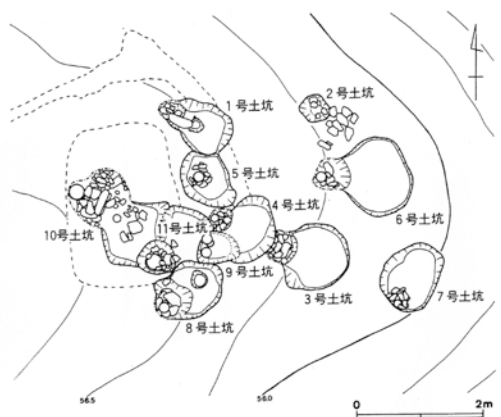
今熊野城跡縄張図



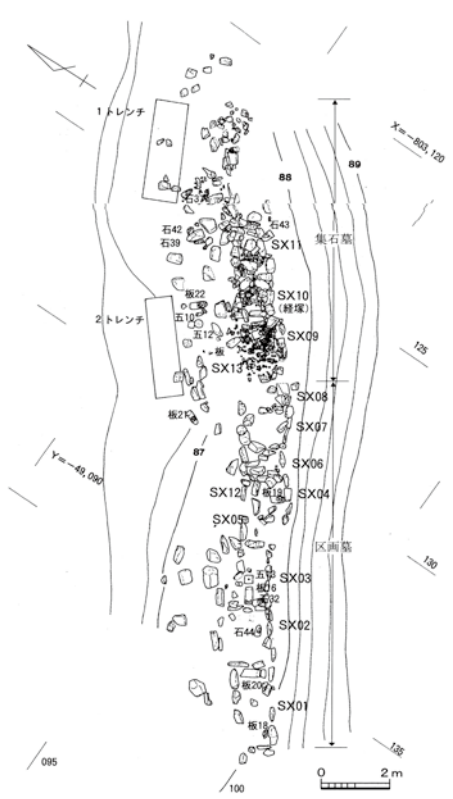
観音寺遺跡平面図・実測図



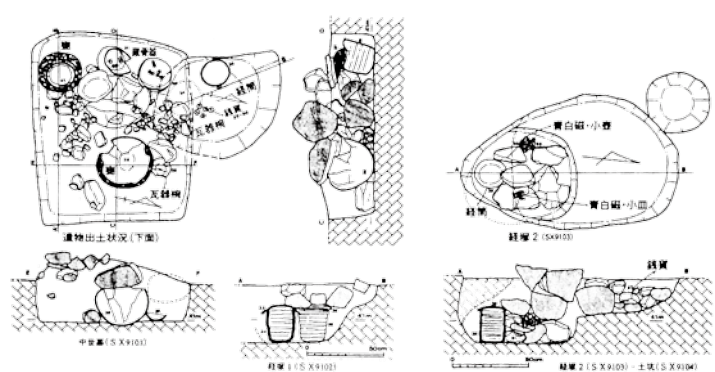
日光寺遺跡平面図・実測図



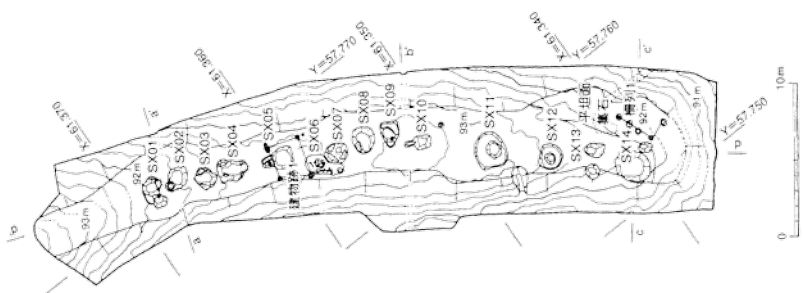
豊谷遺跡平面図



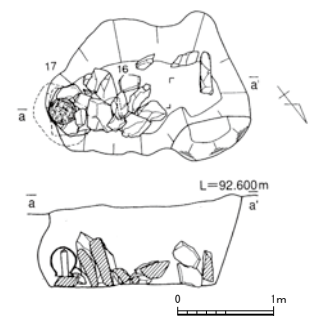
三戸谷遺跡平面図



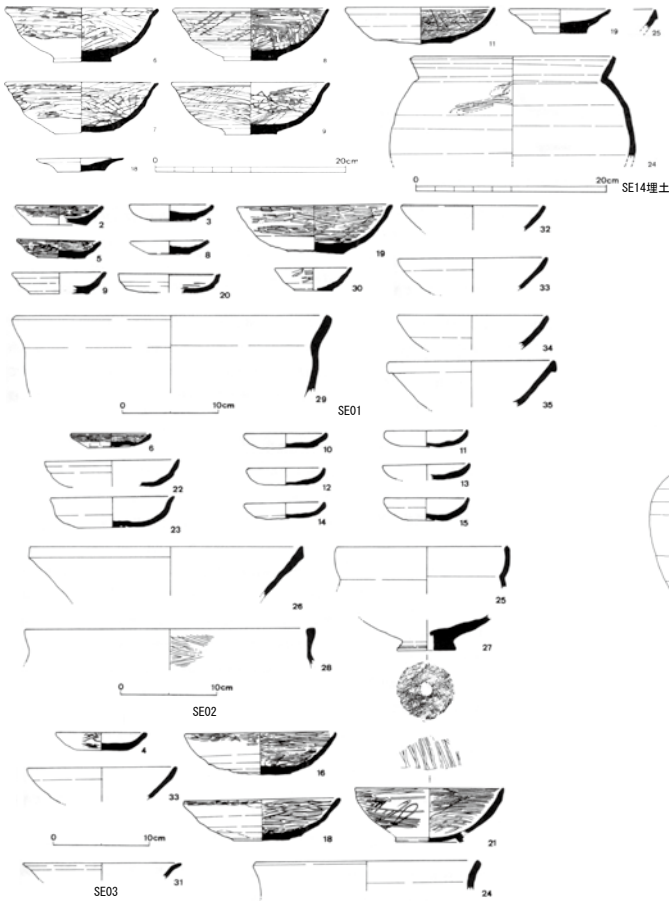
高田山遺跡実測図



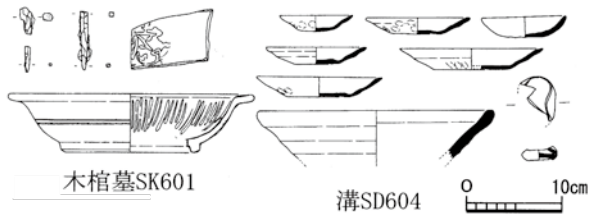
天台南遺跡平面図



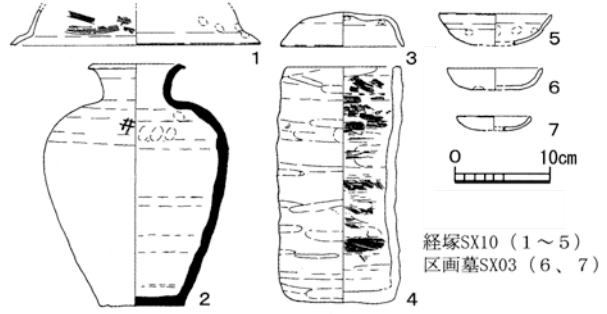
天台南遺跡 S X04実測図



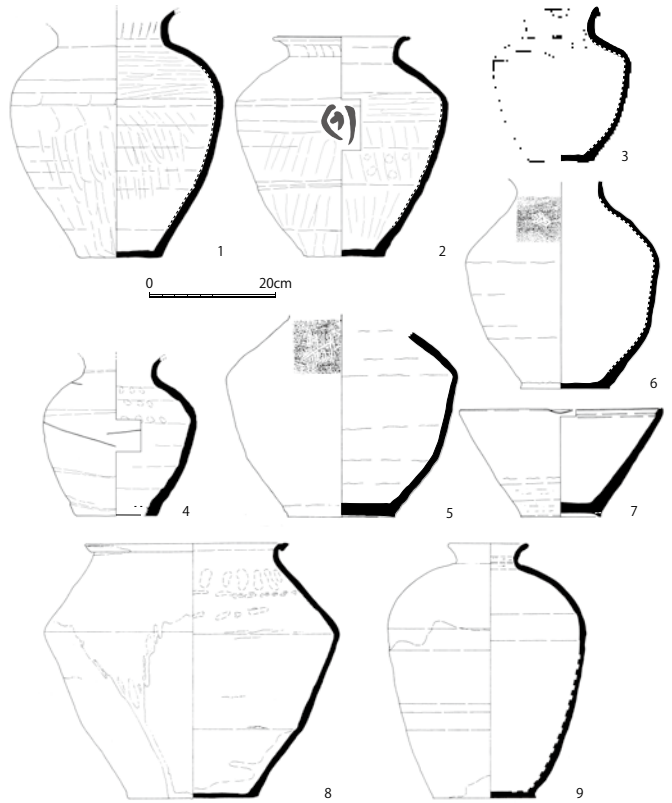
金屋桜内遺跡遺物実測図



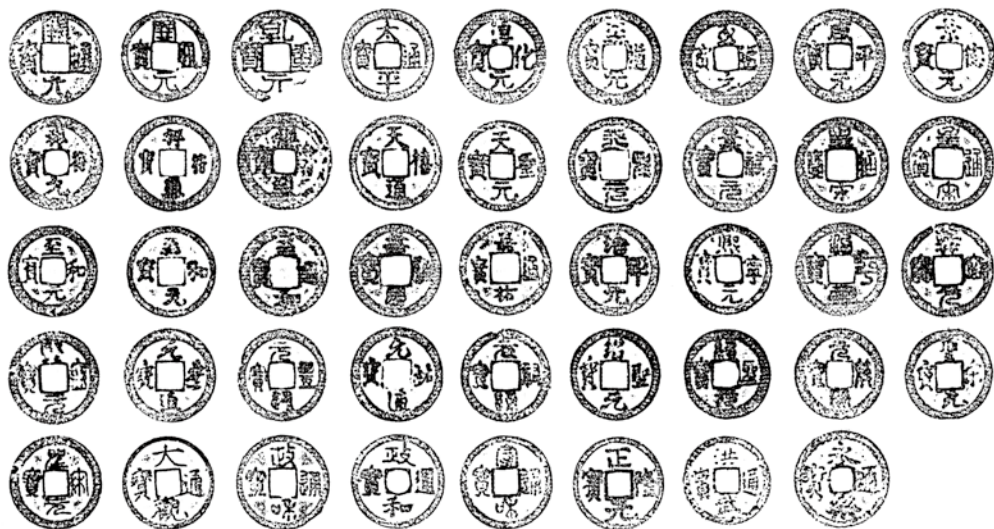
松田遺跡遺物実測図



三戸谷遺跡遺物実測図



丹後出土の中世陶器実測図



三山出土銭拓影

大川遺跡の調査成果について

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査員 綾部 侑真

はじめに

大川遺跡は京都府舞鶴市大川に位置し、由良川河口から約8.5km遡った左岸に位置します。調査地の西側には、式内社である大川神社が鎮座しています。

これまで、舞鶴市教育委員会と京都府教育委員会によって2度の調査が行われています。昭和61年に舞鶴市教育委員会によって行われた調査では、弥生時代の遺物のほか、古墳時代～江戸時代の各時代の遺構・遺物が確認されています。

今回の発掘調査は、由良川下流部緊急水防災対策事業に伴い、築堤に先立って実施したものです。発掘調査期間は平成24年10月から平成26年2月まで、調査面積は10,460㎡です。

遺構の概要

調査は、大きく下流側からA地区・B地区・C地区の3か所に分けて実施しました。調査の結果、弥生時代から室町時代の遺構・遺物を検出しました。本日は、室町時代(14世紀)と平安時代後期～鎌倉時代前期(12世紀後半～13世紀前半)の遺構・遺物を中心に報告します。

(1) 平安時代後期～鎌倉時代

各調査区で掘立柱建物、^ろ炉跡、井戸、土坑、柱穴、溝などを多くの遺構を検出しました。遺構の数が多いので、調査区ごとに報告をさせていただきます。

① A地区 鍛冶工房跡とみられる掘立柱建物、炉跡の他、井戸、多数の土坑、柱穴などを検出しました。調査区の中で、大きく分けて、3か所に遺構のまとまりがみられます。

鍛冶工房関連建物跡 1 A地区の南西で検出した鍛冶工房関連建物跡です。掘立柱建物4棟(S B02～05)、炉跡、土坑などを検出しました。建物跡は4棟が重なり合っています。短い期間の中で、建て替えが行われたようです。

S B02は東西3間(6.2m)、南北2間(4.6m)の総柱の建物跡です。S B03は東西3間(6.2m)、南北2間(4.6m)の総柱の建物跡です。S B02・03は建物主軸を同じくし、柱筋が南北方向で揃うことから同時期の建物である可能性があります。S B04は東西3間(5.9m)、南北4

間(7.9m)の総柱の建物跡です。建物に伴う柱穴の切り合い関係からS B02より後に建てられたことが分かります。S B05は東西3間(7.7m)、南北6間(17m)の総柱の建物跡です。4棟のうち、最も大きな建物ですが、他の建物との新旧関係はわかりません。

S X03はS B02～05の内側で検出した炉跡です。直径約0.4mの円形で、深さは0.2mを測ります。内面の土は褐色に変色し、硬化していました。一部はガラス化しており、高温で焼けたことが分かります。同じような土の変色は、下層でも確認でき、何度か炉を作り直しながら使用したようです。S X03の周囲からは、鍛造^{たんぞう}を行った際に飛び散る鍛造剥片^{ほくへん}や、粒状滓^{りゅうじょうさい}がみられ鍛冶炉であったことが分かります。S X03の他に、同様の鍛冶炉を4か所(S X28、S X29、S X67、S X566)を検出しています。

S K105はS B02～05の北側で検出した土坑です。長辺0.6m、短辺0.4mの長方形を呈し、深さは0.15mを測ります。土坑内からは完形の土師器皿37枚が出土しました。土坑中央には方形の石が据えられおり、一部火を受けて赤色化していました。近くに鍛冶炉があることや完形の土器が多く出土していることなどから、鍛冶に関係する祭祀に係る遺構と考えられます。

鍛冶関連建物跡2 A地区の北東で検出した鍛冶関連建物跡です。掘立柱建物3棟(S B06～08)、炉跡、土坑などを検出しました。

S B06は東西1間(2.4m)、南北2間(5.6m)の建物跡です。S B07は東西2間(5.2m)、南北1間(2.5m)の建物跡です。S B08は東西2間(4.8m)、南北1間(2.7m)の建物跡です。建物中央付近で炉跡を検出しました。これら3棟の建物は、方位をそろえていることから同時期の遺構と考えています。

S X566は、S B08内で検出した炉跡です。直径0.3mの円形を呈し、中央は灰色に硬化していました。層位と位置関係からS B08に伴う炉跡と考えます。

S K544は、S B07の北側で検出した土坑です。東西1.4m、南北0.3mの不定形で、深さは0.2mです。埋土には土師器皿などの他、炉壁片^{ろへき}が含まれており、鍛冶に伴う廃棄土坑と考えられます。

その他の遺構 A地区の中央付近で掘立柱建物5棟(S B09～13)、井戸1基(S E412)などを検出しました。

S B09は東西1間以上(2.36m以上)、南北3間(8.8m)の建物跡です。S B10はS B09と重複して検出した東西1間(1.5m)、南北2間(3.3m)の建物跡です。S B11は東西2間(5m)、南北2間(5m)の総柱の建物跡です。建物に伴う柱穴には、土師器皿を複数枚重ねて埋納しているものや、刀子^{とうす}が出土するものがあり、建物の築造時に祭祀を行っていたようです。S B12は東西2間(5m)、南北2間(5m)の建物跡です。柱穴の切り合い関係から、

S B11より古くなります。S B13は東西3間(7m)、南北2間(5m)の建物跡です。これらの建物跡の周囲では炉跡は検出されていません。

S E412はS B09の南側で検出した井戸です。丸木舟^{まるきぶね}が井戸枠に用いられていました。一艘^{いっそう}を前後に切り離し、舷側部分^{げんそく}を合わせて筒状にして井戸枠としています。その際、船のへさは切り取り、胴部のみを使用しています。2つに分けられた丸木舟の割口は接合しませんでした。もともとは全長2.6m以上、幅0.6mの大きさになります。井戸枠内から数十点の桃核が出土しています。

②B地区 掘立柱建物跡5棟、井戸4基、道路側溝などを検出しました。

掘立柱建物跡 S B14は南北3間(9.1m)、東西3間(7.5m)の総柱の建物跡です。S B15は東西1間以上(2.2m以上)、南北3間(7.2m)の建物跡です。S B16は東西2間以上(4.5m以上)、南北2間(4.4m)の建物跡です。S B15と重なって検出しました。S B17は東西5間(7.6m)、南北2間(3.9m)の建物跡です。S B18は東西1間以上(2.2m以上)、南北2間(4.9m)の建物跡です。S B18以外の建物は、おおよそその方位を揃えます。

井戸 S E230は掘形が円形を呈する方形隅柱縦板横棧留め^{ほうけいすみばしらたていたよこざんどう}の井戸です。S E231は掘形が隅丸方形を呈する方形隅柱縦板横棧留め^{まげもの}の井戸です。井戸内から曲物底板状の木製品が出土しました。S E280は掘形が方形を呈する、隅柱縦板横棧留め^{まげもの}の井戸です。S E352は掘形円形の井戸です。井戸の底には、一辺1~1.2mの方形に近い範囲にこぶし大の川原石が敷かれていました。敷石の上から長さ0.8mの角材が出土しており、井戸枠の部材とみられます。

道路側溝 S B15の南東で、並行する溝2条(S D293・297など)を検出しました。溝と溝の距離は1.8mで溝は幅0.2m、深さ0.05m程度で検出長15.4mです。南西から北東へ延びており、道路の両側側溝と考えられます。

③C地区 掘立柱建物4棟、井戸3基、土坑などを検出しました。

掘立柱建物 C地区では多くの柱穴を検出しました。そのうち、4棟の建物を復元することができました。S B19は南北2間(4.2m)、東西2間(2.3m)以上の建物跡です。S B20は東西2間(4.0m)以上、南北2間(3.9m)の建物跡です。S B21は東西3間(6.0m)、南北2間(3.9m)の建物跡です。S B19~21の建物は方位を揃えます。S B22は東西1間(1.8m)以上、南北2間(4.0m)の建物跡です。

井戸 C地区の中央より南西側で検出しました。S E401は掘形が円形を呈する井戸です。丸木をくりぬいて作られた木製の井戸枠をもちます。A地区で検出したS E412と似た井

戸枠ですが、この井戸枠は円筒形となっています。S E 402は掘形が円形を呈する井戸です。井戸底部から上部に向かって、^{まげもの}曲物・横板・破損した常滑焼の大甕を組み合わせて井戸枠にしていました。S E 801は掘形が円形を呈する、隅柱縦板横棧留めの井戸です。

出土遺物 遺物は、土師器皿、土師器杯、土師器鍋、黒色土器碗、瓦器碗・皿、東播系須恵器鉢、石鍋、中国製白磁・青磁、中国製青白磁合子、砥石、土錘などが出土しています。A地区からは、そこで製造されたのかはわかりませんが、^{てつとう}鉄刀、^{てつぶ}鉄斧、^{ばぐ}馬具などの金属器が出土しています。また、^{せきたい}石帯といわれる古代の帯飾りが1点みつかっています。

(2) 室町時代

集石遺構、掘立柱建物の他、多くの柱穴、^{はしらあな}柵列などを検出しました。

集石遺構 A地区とB地区で2基を検出しました。S X 01はA地区の中央よりやや南側で検出しました。東西0.75m、南北0.7mの方形に石が積まれていました。高さは0.2mです。外周には20～25cm、厚さ10cmの石を配置し、内部には7～10cmの丸まった河原石を配置しています。下部構造はありませんでした。出土遺物は少ないですが、中国製龍泉窯青磁片が出土し、この土器の年代観より14世紀には存在していたと考えられます。S X 59はB地区で検出しました。S X 01と比べて残りが悪く、いびつな形をしていましたが、長辺1.4m、短辺1.1m、高さ0.2mの範囲に石を配していました。これらは石塔などの台座になるのではないかと考えられます。

掘立柱建物 室町時代の建物は、A地区で検出しました。S B 01は東西1間(1.2～1.6m)、南北3間(3.5m)の建物跡で、建物の主軸は由良川の河道とほぼ並行します。B地区の南東からC地区の中央付近にかけては多くの柱穴を検出しましたが、建物の復元には至っていません。

柵列 B地区で5条の柵列を検出しました。直径0.1～0.15mの円形の掘形^{ほりかた}の杭跡が、幅1～2mの範囲に集中します。柵列の方向は北西から南東に向き、由良川と直交します。土地の境界を示すものと考えます。

出土遺物 遺物は、土師器皿、瓦器^{はがま}羽釜、丹波焼甕^{かめ}、瀬戸美濃陶器、中国製青磁、高麗^{こうらい}象嵌青磁、砥石などのほか、銅製錘が出土しました。銅製錘は全長2.8cm、幅2.0cmで、先端には紐^{ひも}を通すための穴があります。^{さお}棹ばかりに使用した錘です。重さは40.6g(約11匁)ありました。

まとめ

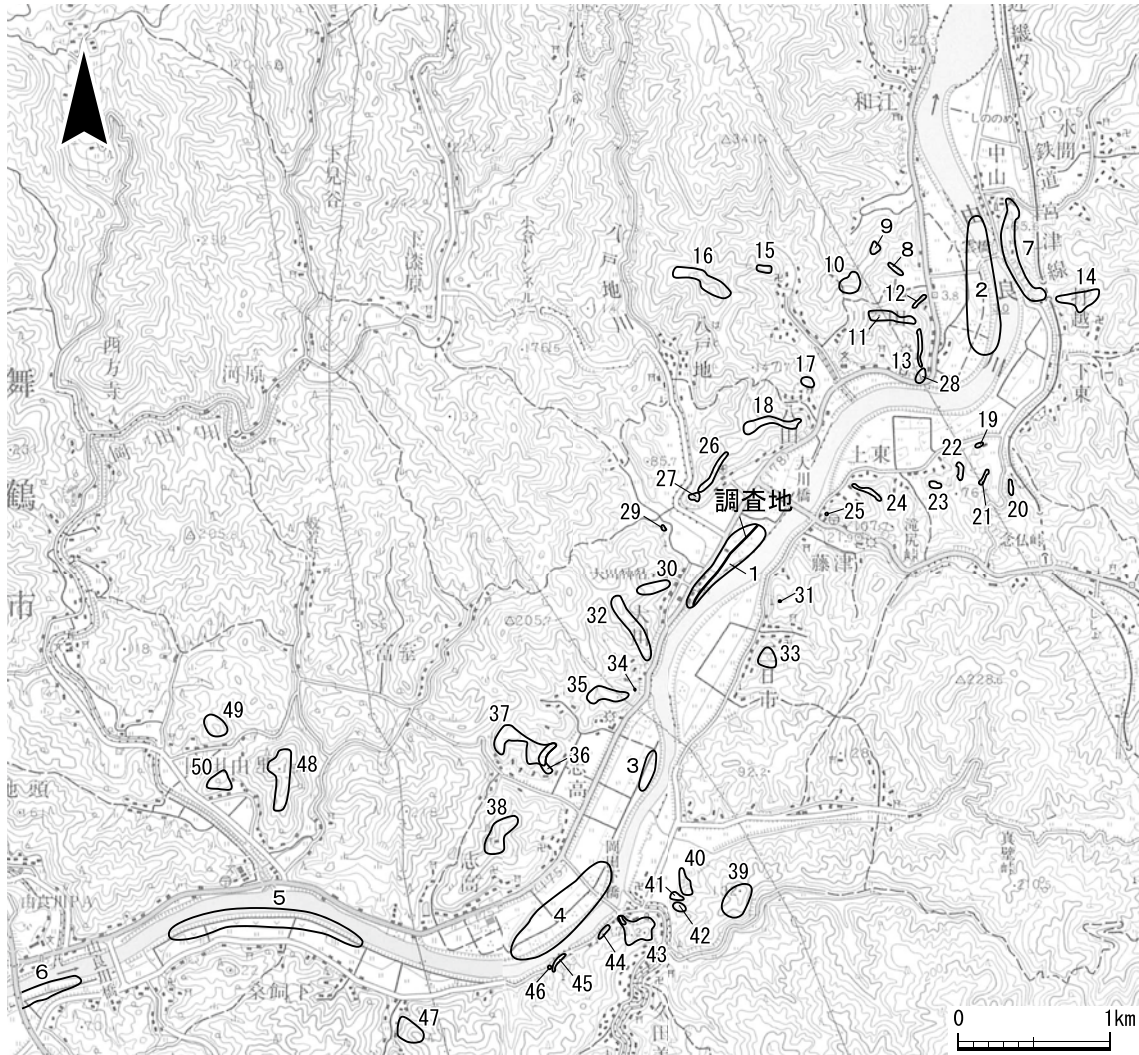
今回の発掘調査で、平安時代後期から室町時代にかけての多くの遺構・遺物を検出しま

した。平安時代時代後期～鎌倉時代は遺構が顕著で、掘立柱建物跡、鍛冶関連建物、井戸、道路側溝などを検出しました。C・B地区に掘立柱建物や井戸が集中し、一般の居住域と考えられます。C地区は特に遺構密度が高く、多くの柱穴を検出しました。建物を復元できたものは少ないですが、何度も建て替えが行われたとみられます。小字名に「町路」とあるように長期間にわたり集落の中心地であったと考えられます。A地区は炉跡や廃棄土坑など鍛冶関連遺構があり、鍛冶工房として利用されていました。鍛冶関連建物1と、B地区で検出したSB01との距離は約80mを測り、その間にほとんど遺構がありません。この空閑地によって、火を扱う火事関連建物と、居住域を区画していたと考えています。

室町時代では掘立柱建物跡、集石遺構、柵列を検出しました。掘立柱建物はまとまりがなく、集落の中心からはずれると考えられます。

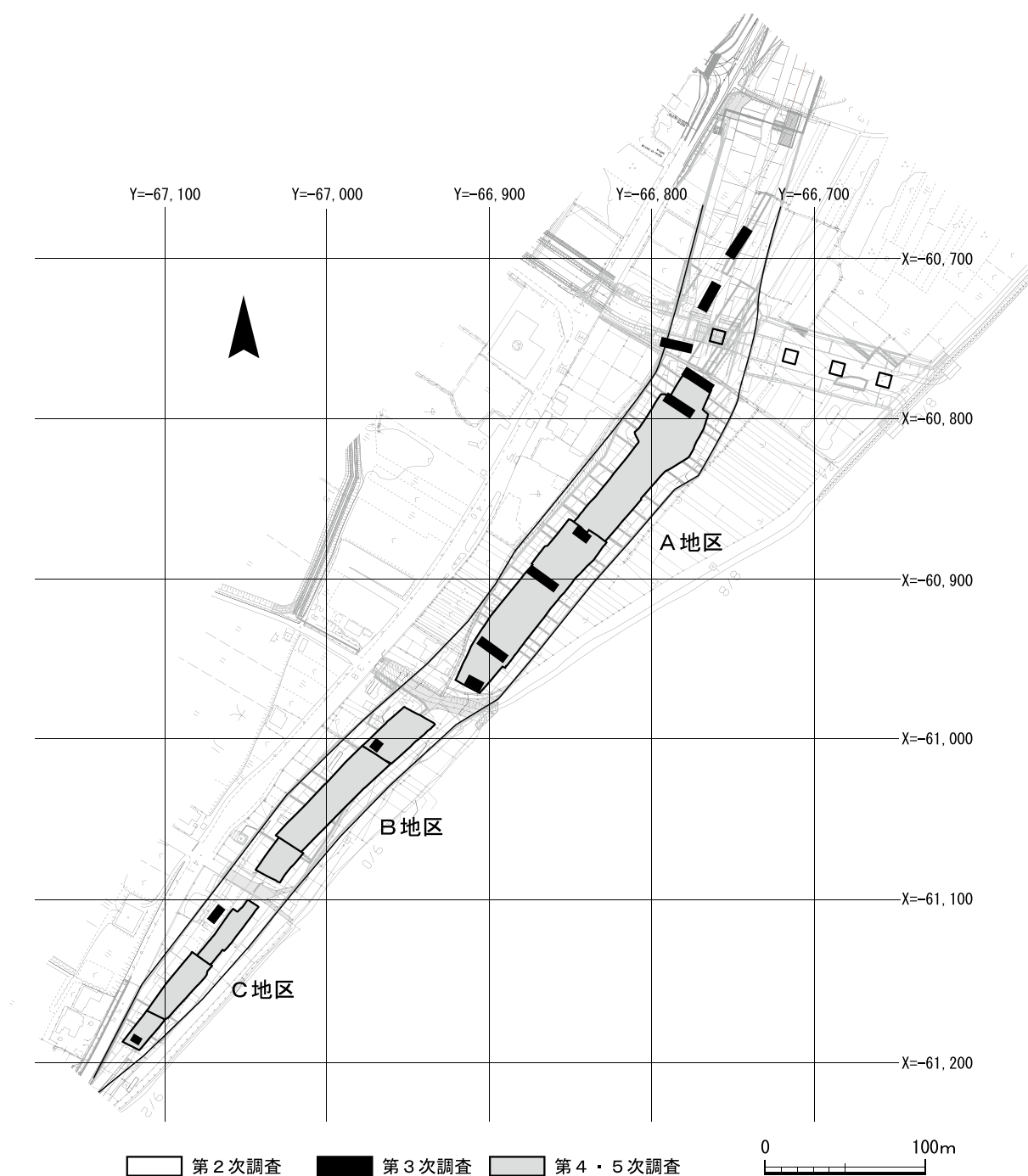
出土遺物では、前述しましたように平安時代から室町時代を通して輸入陶磁器と銭貨が多数出土しました。輸入陶磁器は1,063点を数えます。京都北部では、宮津市中野遺跡周辺で400点以上、福知山市大内城跡で1,300点が出土していますが、それらの遺跡と並ぶ出土点数になります。多くは中国製の白磁や青磁ですが、高麗青磁や朝鮮王朝の陶器も21点出土しています。銭貨は調査全体で、29種173枚が出土しました。そのうち159点がC地区で出土しており、C地区が集落の中心であったことを裏付けています。これらの海外からの輸入品や、他地域の製品の多くは由良川を利用して運ばれたと考えられます。舞鶴湾という良港に近い地域で、由良川流通の拠点的な場所として商業活動が盛んであったといえるでしょう。

メモ

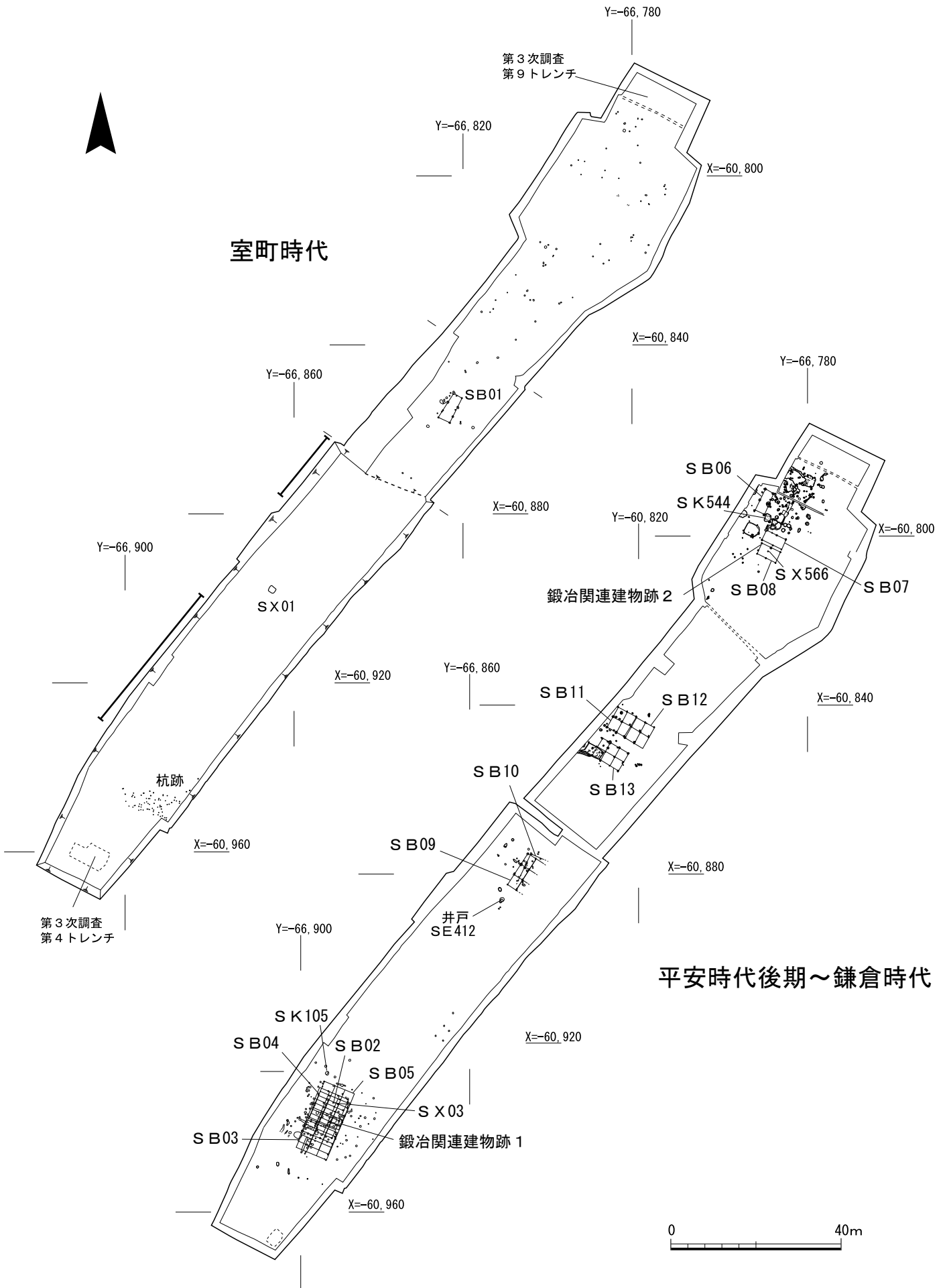


- | | | | |
|-------------|-------------|------------|-------------------|
| 1. 大川遺跡 | 14. 打越城跡 | 27. 八田支城跡 | 40. 土穴城跡 |
| 2. 八雲遺跡 | 15. 丸田安ノ奥城跡 | 28. 丸田東城跡 | 41. 久田美遺跡 |
| 3. 花ノ木遺跡 | 16. 八田コヨリ城跡 | 29. 宮ノ鼻古墳 | 42. 池田日向城跡 |
| 4. 志高遺跡 | 17. 丸田山田城跡 | 30. 徹光山古墳群 | 43. 久田美城跡 |
| 5. 桑飼下遺跡 | 18. 八田城跡 | 31. 由里下古墳 | 44. 川向古墳群 |
| 6. 桑飼上遺跡 | 19. 臼井古墳 | 32. 大川城跡 | 45. シゲツ古墳群 |
| 7. 中山城跡 | 20. 大船古墳群 | 33. 三日市城跡 | 46. シゲツ窯跡 |
| 8. 奥谷古墳群 | 21. 一ノ木古墳群 | 34. 小津田経塚 | 47. 原城跡 |
| 9. 丸田斎宮城跡 | 22. 上東古墳群 | 35. 志高碓山城跡 | 48. 荒張城跡 |
| 10. 祇菌寺跡 | 23. 臼井城跡 | 36. 見取古墳群 | 49. 岡田由里城跡 |
| 11. 丸田宮ノ谷城跡 | 24. 和田古墳群 | 37. 見取城跡 | 50. 荒張支城跡(岡田由里別城) |
| 12. 門戸古墳群 | 25. 峠古墳 | 38. 志高城跡 | |
| 13. 朝宮古墳群 | 26. 八田古墳群 | 39. 池田谷城跡 | |

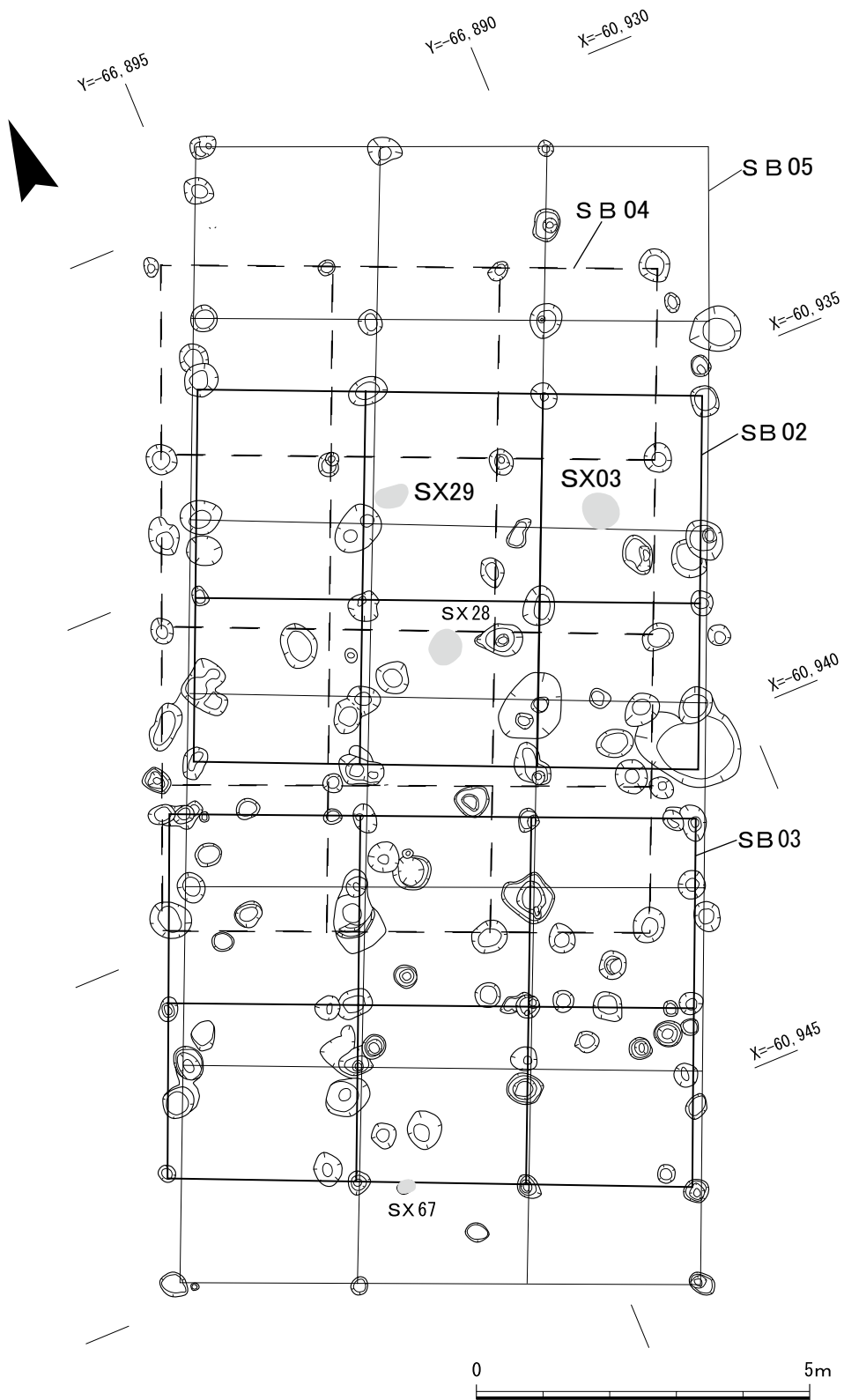
第1図 調査地および周辺主要遺構分布図



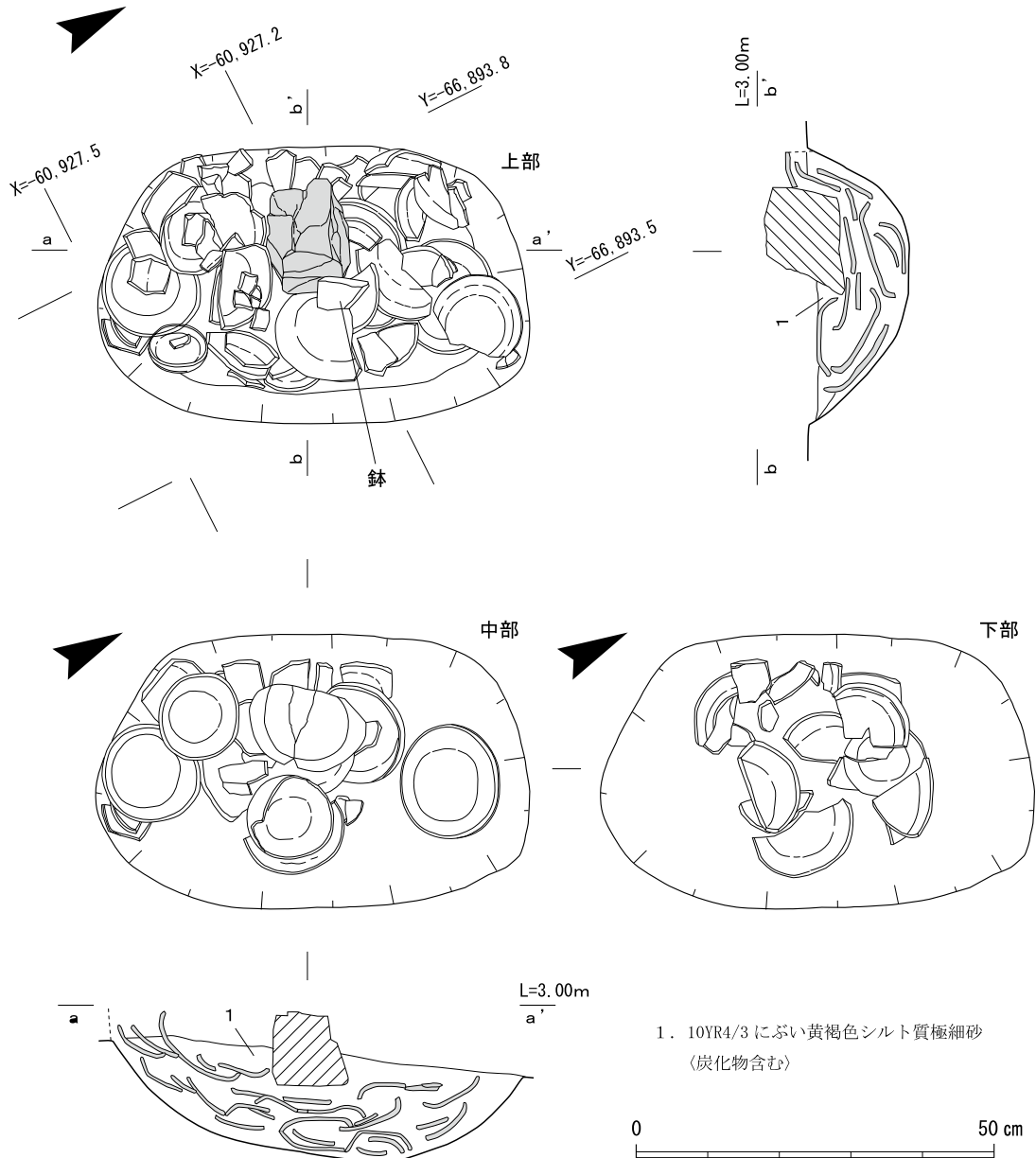
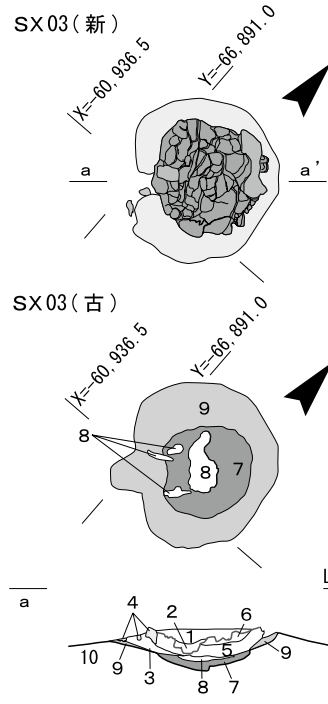
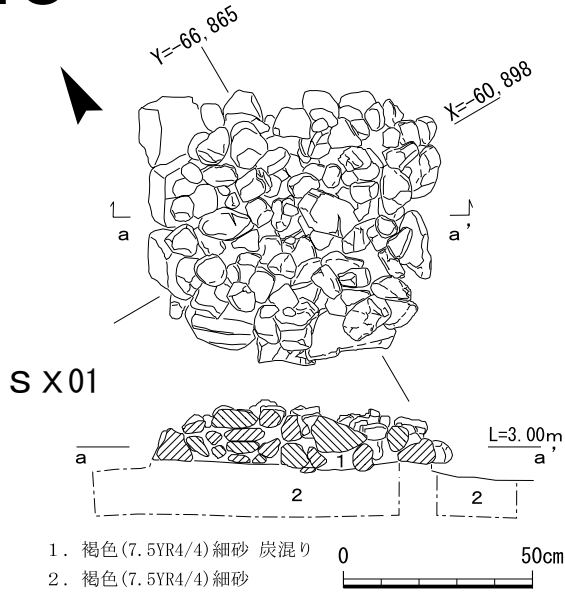
第2図 大川遺跡調査区配置図1



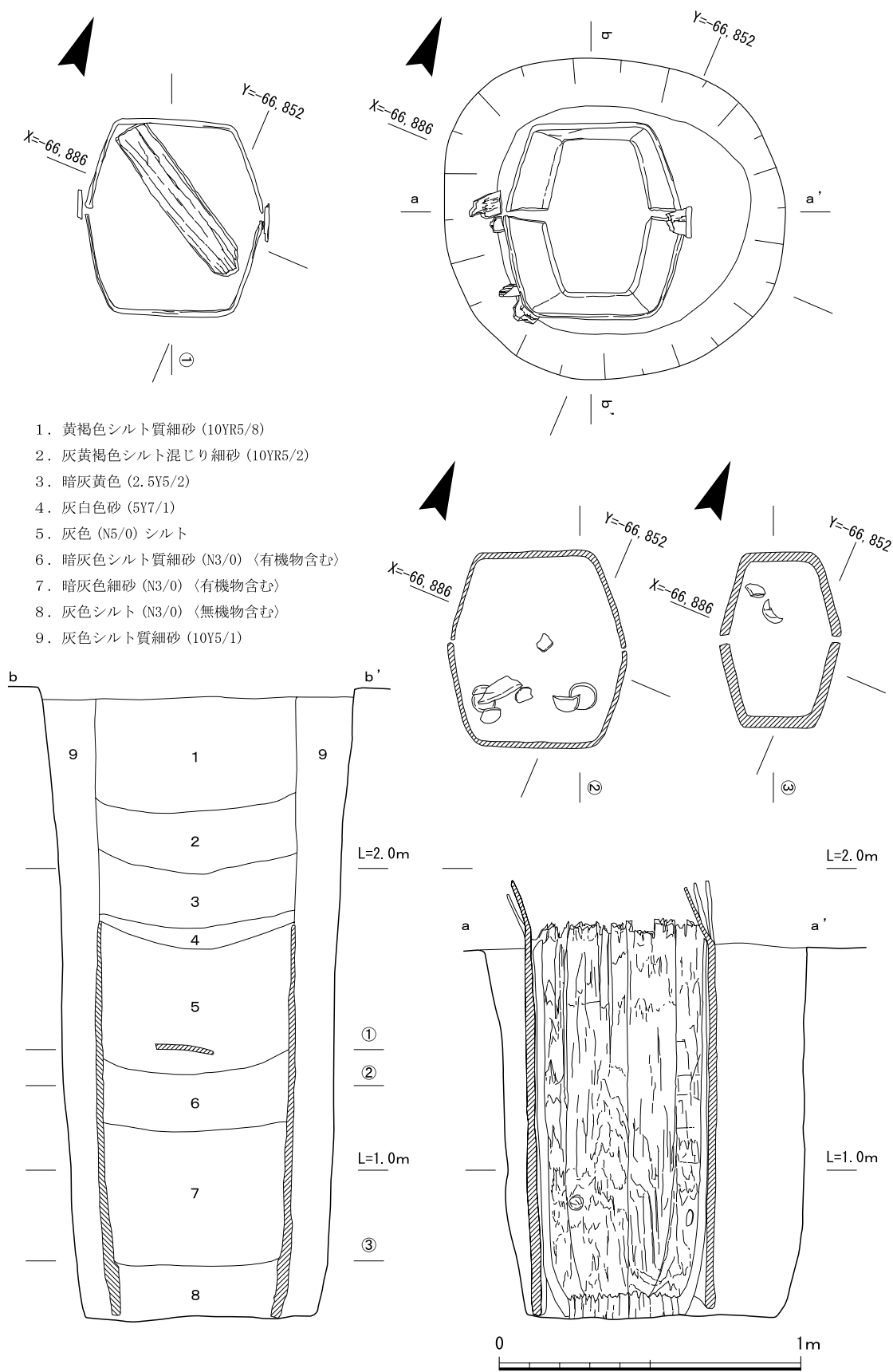
第3図 A地区 遺構平面図



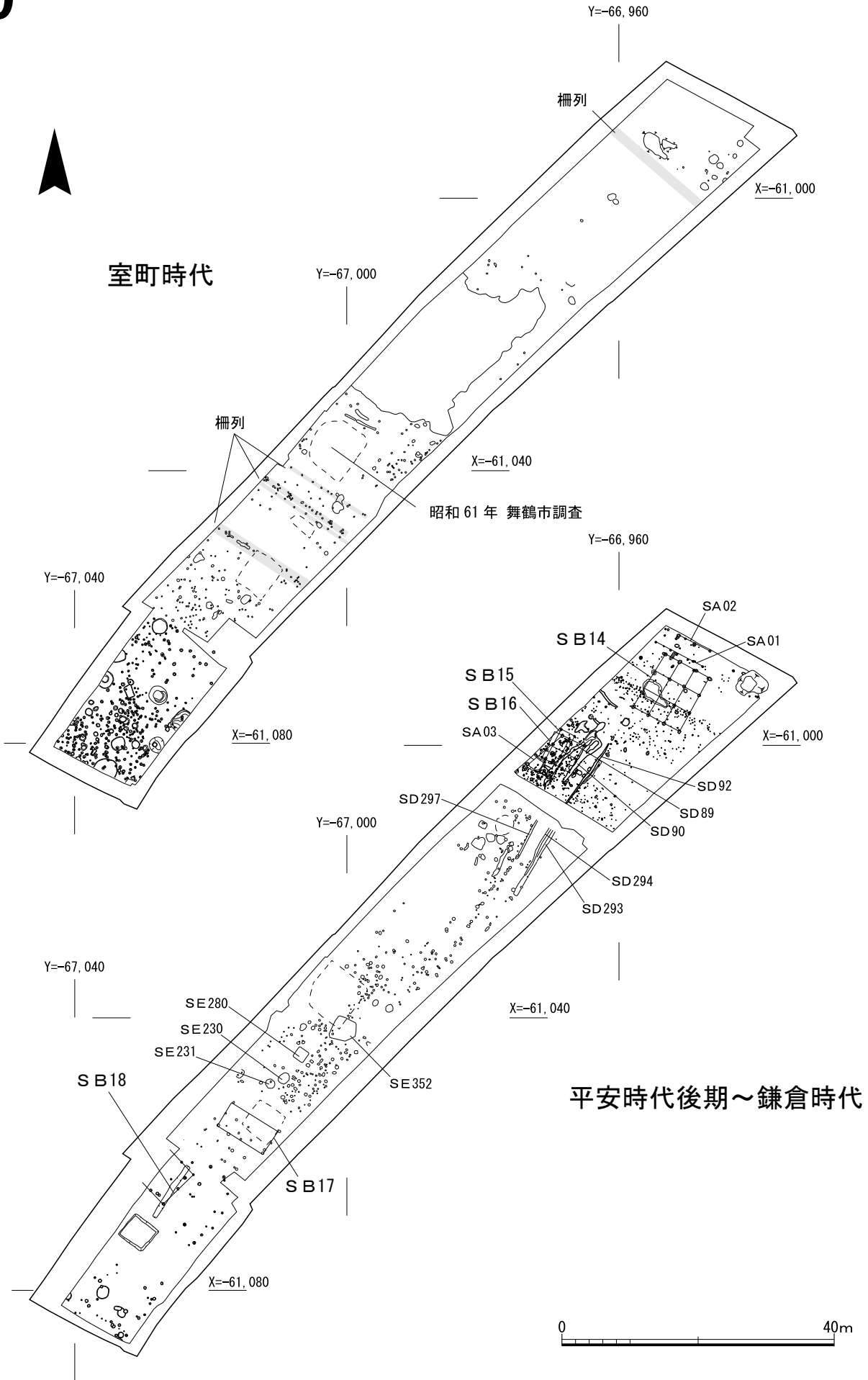
第4図 A地区 掘立柱建物SB02~05



第5図 A地区 主要遺構実測図

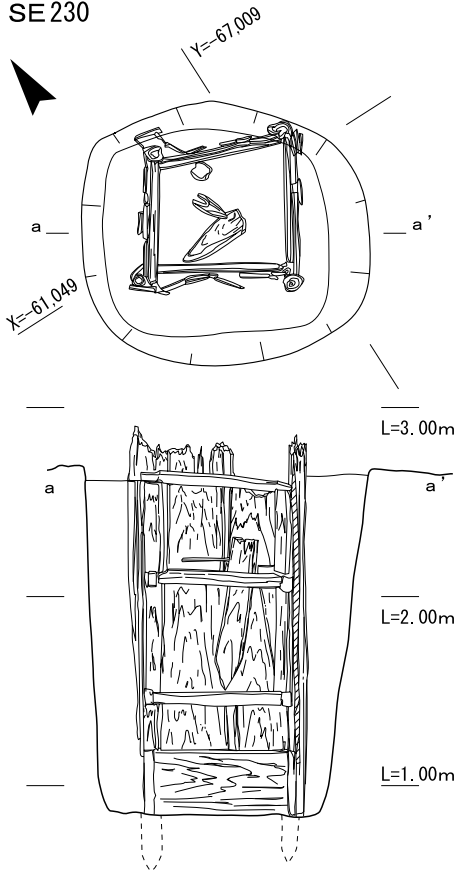


第6図 A地区 井戸 S E 412実測図

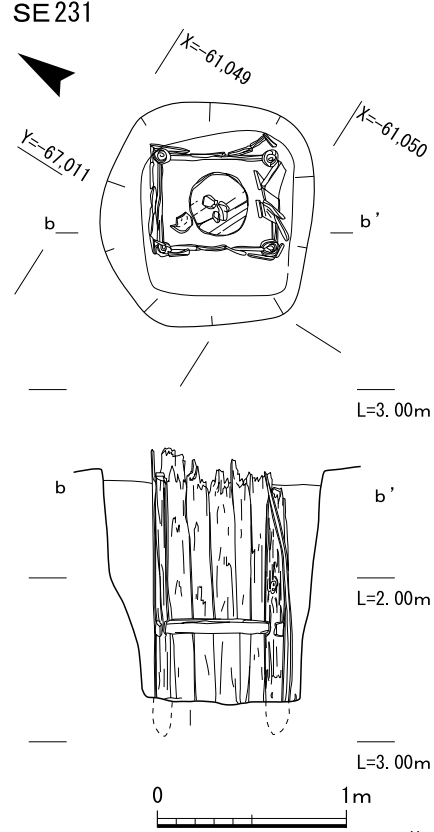


第7図 B地区 遺構平面図

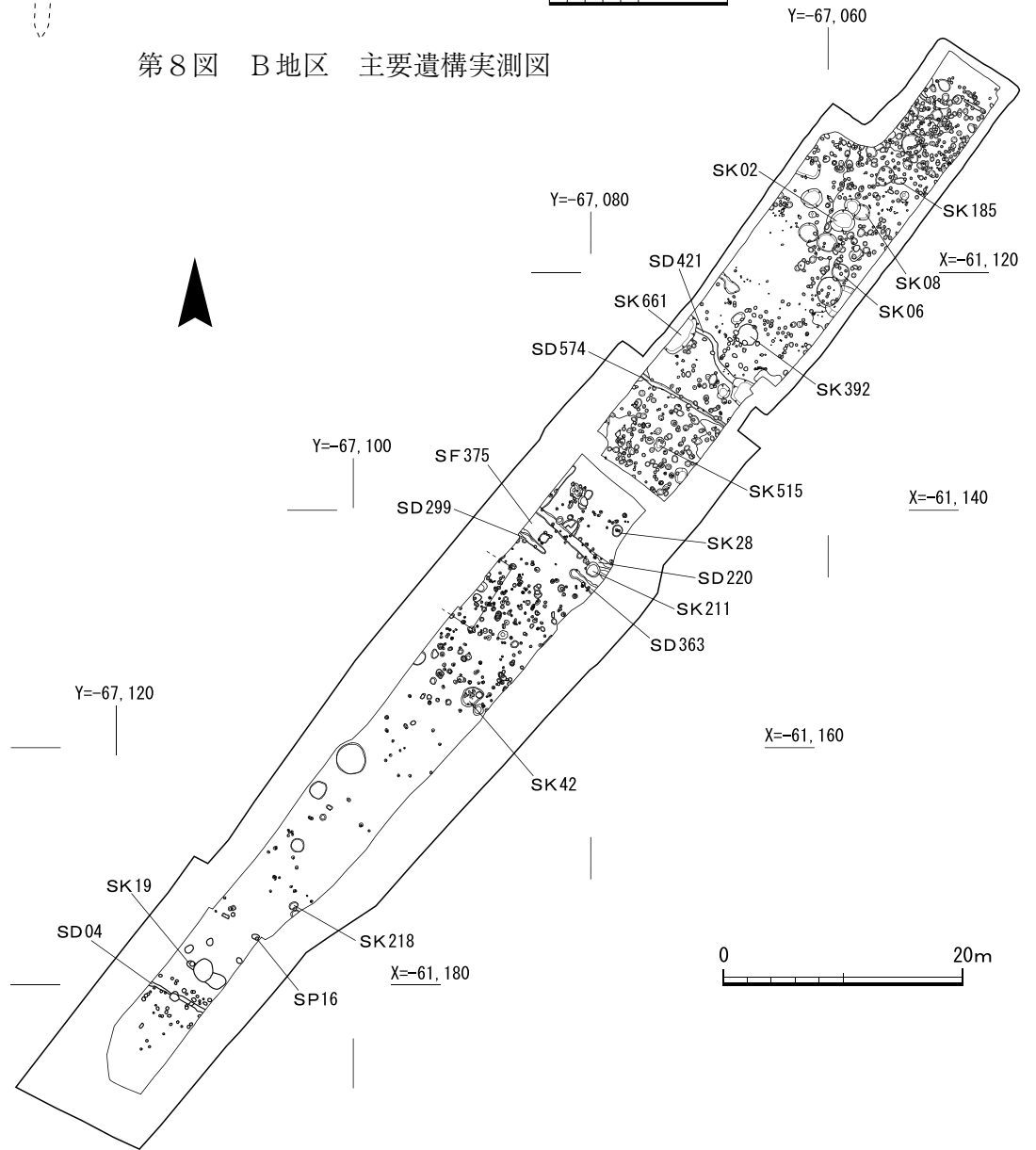
SE 230



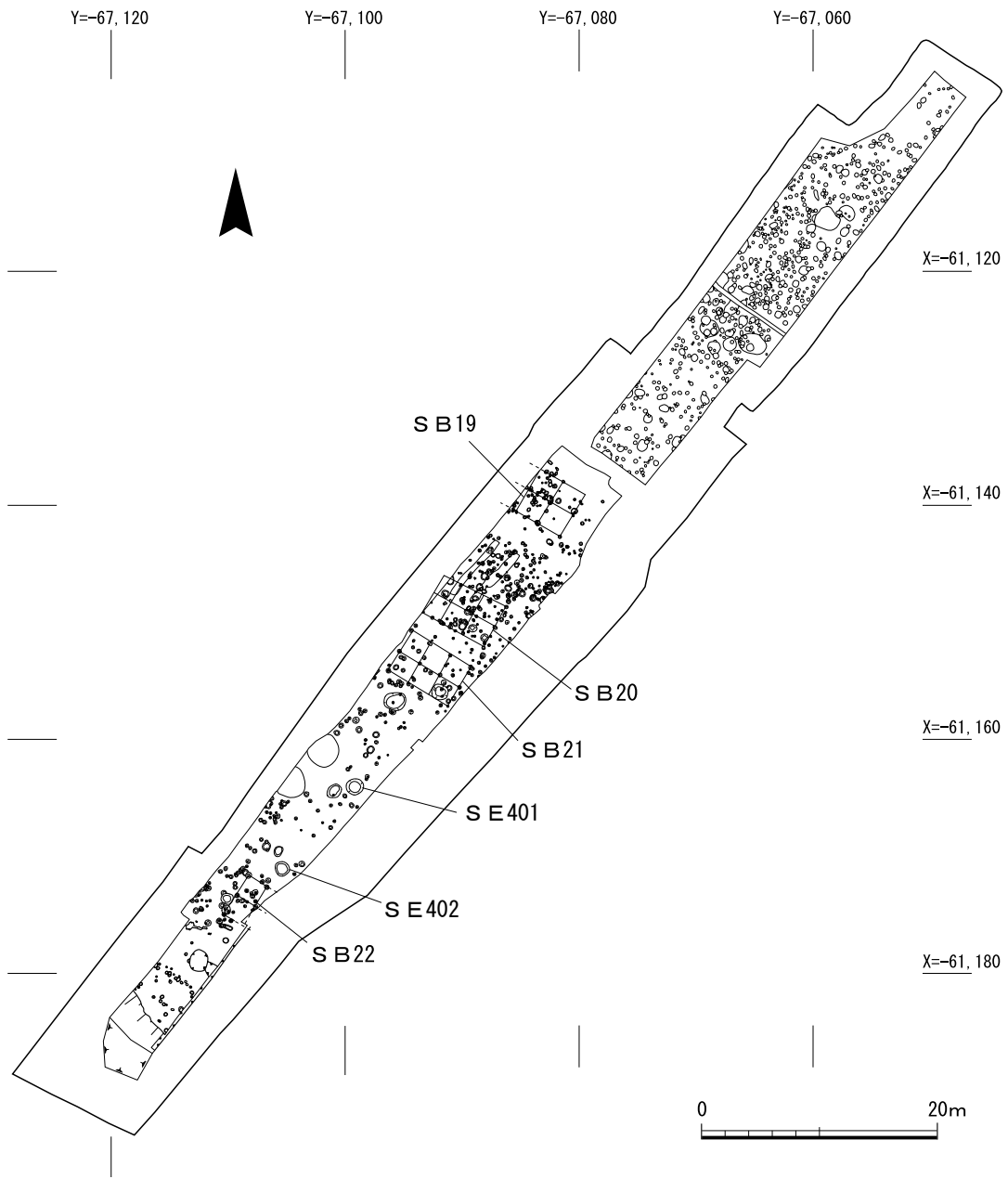
SE 231



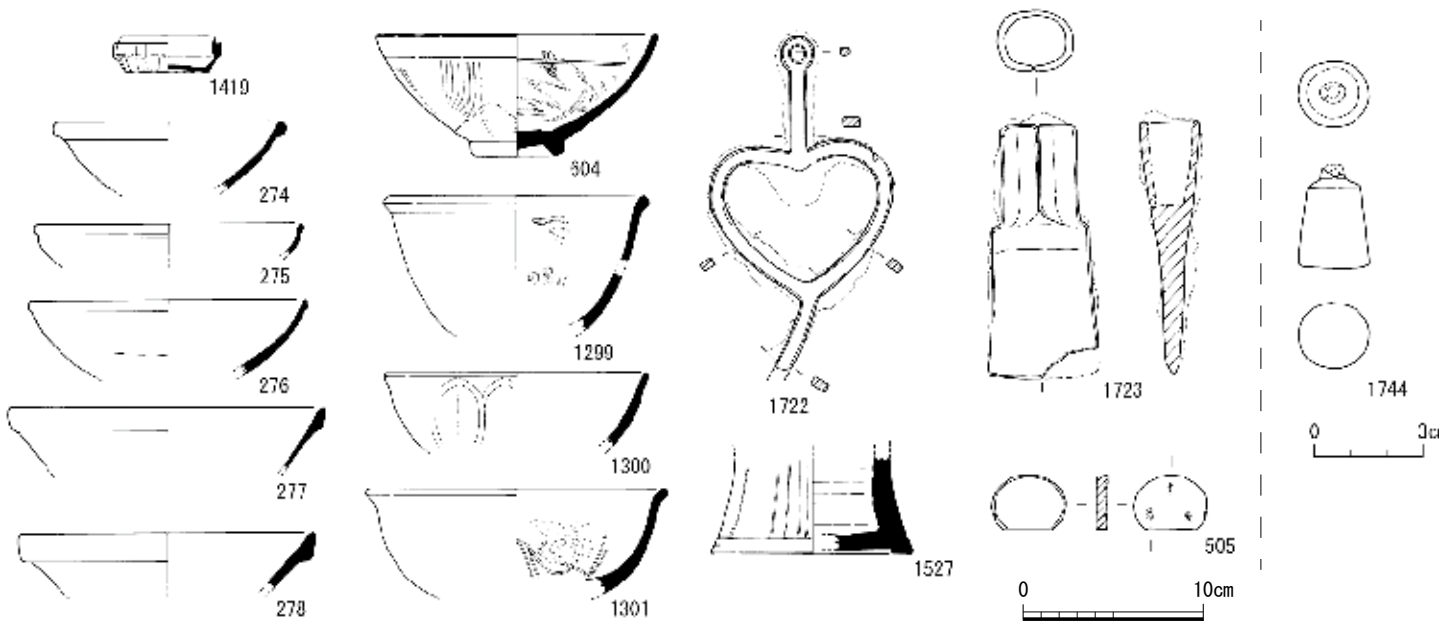
第 8 図 B 地区 主要遺構実測図



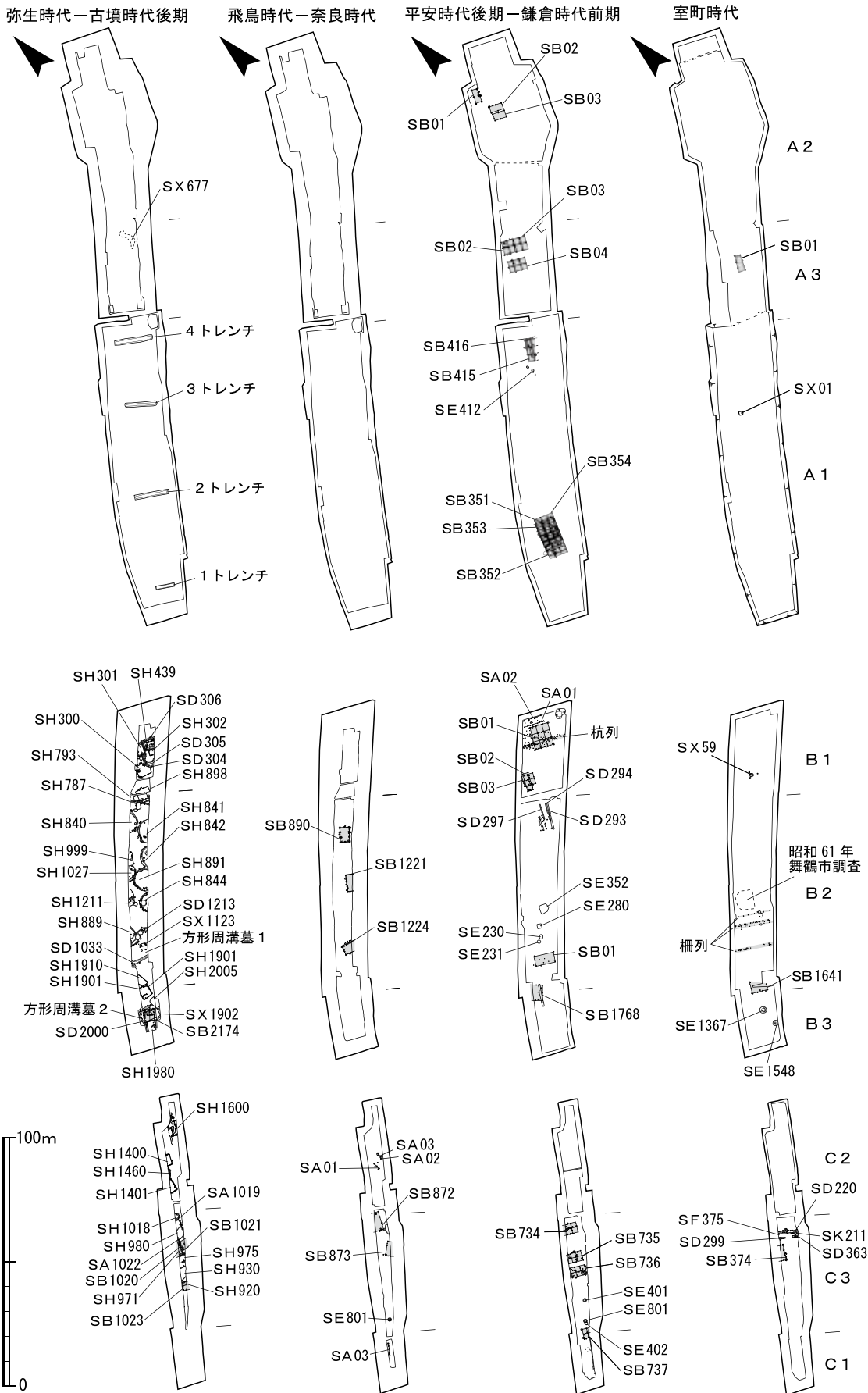
第 9 図 C 地区 遺構平面図(室町時代)



第10図 C地区 遺構平面図(平安時代後期～鎌倉時代)



第11図 遺物実測図



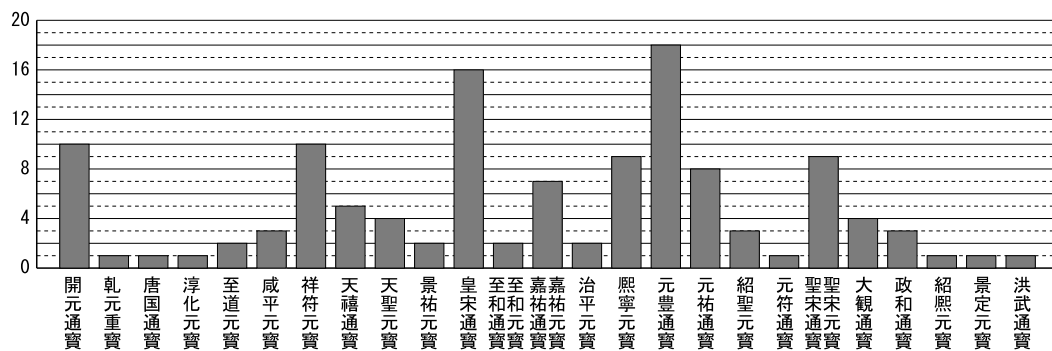
第12図 時期別遺構変遷図

付表1 大川遺跡器種別破片点数

地区名	土師器	須恵器	黒色土器	瓦器	陶器	小計	輸入陶磁器	合計	銭貨
A1	4,095	23	818	114	0	5,050	213	5,263	0
A2	7,761	50	47	65	0	7,923	80	8,003	0
A3	10,459	4	45	39	16	10,563	25	10,588	0
B1	4,101	127	264	52	0	4,544	127	4,671	4
B2	6,927	212	312	352	27	7,830	145	7,975	2
B3	8,337	28	1	0	0	8,366	39	8,405	8
C1	422	8	5	2	2	439	21	460	49
C2	9,401	164	62	135	135	9,897	364	10,261	95
C3	5,956	293	31	116	109	6,505	49	6,554	15
計	57,459	909	1,585	875	289	61,117	1,063	62,180	173

付表2 大川遺跡輸入陶磁器種別破片点数

調査区	白磁							青白磁		青磁													小計	合計		
	碗II	碗IV	碗V	その他碗	皿	小壺	壺	小壺	合子	龍泉窯磁碗I	龍泉窯鎬蓮弁文碗	龍泉窯蓮弁文碗	龍泉窯幅広蓮弁文碗	龍泉窯細蓮弁文碗	龍泉窯無文碗	龍泉窯皿	龍泉窯杯・盤	龍泉窯香炉	同安窯碗	同安窯皿	生産地不明	褐釉・緑釉・その他			高麗・朝鮮	
A-1	8	27	15	60	69	1	1	1	0	11	1	0	1	0	8	6	0	0	2	2	0	0	0	0	213	318
A-2	0	5	21	15	1	0	1	2	4	14	2	0	0	0	7	4	0	0	2	0	0	2	0	80		
A-3	0	1	3	6	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3	3	0	0	5	0	0	0	0	25		
B-1	4	9	7	27	20	1	1	1	0	9	10	3	1	0	19	8	4	0	2	0	0	1	0	127	311	
B-2	1	13	10	36	21	0	1	0	1	11	11	3	6	0	15	6	4	0	5	0	0	0	1	145		
B-3	0	1	0	5	8	0	1	0	1	1	5	0	0	1	11	2	1	0	0	0	0	0	2	39		
C-1	0	1	0	0	4	0	0	1	2	0	2	0	0	4	5	0	1	0	0	0	0	0	1	21	434	
C-2	0	11	22	60	48	2	5	7	4	9	33	6	1	7	90	13	21	0	3	1	0	5	16	364		
C-3	0	0	2	10	4	0	2	1	3	1	7	1	1	1	5	3	1	0	3	0	0	3	1	49		
計	13	68	80	219	176	4	13	13	15	56	73	13	10	13	163	45	32	0	22	3	0	11	21	1,063	1,063	



第13図 大川遺跡出土銭貨グラフ

戦国時代の舞鶴と中山城を考える

～中山城発掘調査を踏まえて～

京都府立東舞鶴高等学校
教諭 廣瀬 邦彦

はじめに

戦国時代の舞鶴は若狭の勢力が浸透していたとよく言われます。たとえば近世のある記録によると、東舞鶴の市場城や蛇島城の城主は逸見駿河守とされていますが、この人物は若狭の守護武田氏の有力家臣で若狭高浜の人物です。

このように、戦国時代のある時期に舞鶴が若狭勢に支配されていたということは通説となっていますし、加佐郡内に若狭勢が攻め込んでいた様子を示す1次資料も残っています。

しかし、若狭勢がどのような形で加佐郡を支配していたかは明らかになっていません。

若狭白井氏の活動

室町時代から戦国時代の若狭武田氏の家臣に白井氏という一族がいます。この一族は守



図1 舞鶴周辺地図

護武田氏の下で加佐郡に何度も攻め込んでいます。永正17(1520)年、白井氏が主人の武田氏から水間村に領地を賜ったという記録が残っています。

史料1(白井家文書 宮津市史史料編第一巻)

丹後国加佐郡之内水真村之事、年貢諸成物寺社等無相違可有知行候、闕所方之事者、可為最前定置趣候也、謹言

「永正十七年」

十二月廿七日

(武田元信)
紹壯(花押)

(清胤)
白井石見守殿

この文書で、武田元信は白井清胤に水間村の知行を宛行っています。また、闕所(領主がいなくなった土地)については、すでに指示したとおりに処置するよう申し付けています。水間村は中山村の隣村です。

次に、天文7(1538)年に武田宗勝が白井清胤の子の光胤に次の感状を送っています。

史料2(白井家文書 宮津市史史料編第一巻)

(封紙ウツ書)
「白井民部丞殿 宗勝」

於去月十五日丹州加佐郡水間村合戦、被官人筑鎗兵具色々分捕之、剩頸一討捕之忠節候也、弥可抽戦功之状、如件

天文七
十二月廿六日

(武田宗勝)
(花押)

白井民部丞殿

この感状によると、白井光胤はこの年の11月15日に水間村での戦いで、敵の首ひとつあげるなどの功績をあげています。この二つの文書の間の期間、つまり永正17(1520)年から天文7(1538)年までの18年間、白井氏は加佐郡支配のために奔走しています。大永2(1522)年と推定される南部家行書状写では、「加佐郡輪番人夫」という役をつとめていたらしいことがわかりますし、大永5(1525)年と推定される武田元光の書状では、加佐郡大内庄(西舞鶴の一部)について油断なく警固をするよう申し付けられています。ですから、この期間、白井氏は水間村を領しながら、若狭方の加佐郡支配の一翼を担っていたと考えられます。

このように、加佐郡での一定の軍事的役割を期待されていた白井一族ですが、その知行地である水間村に館や居城のあとは確認されていませんし、そういう伝承もありません。

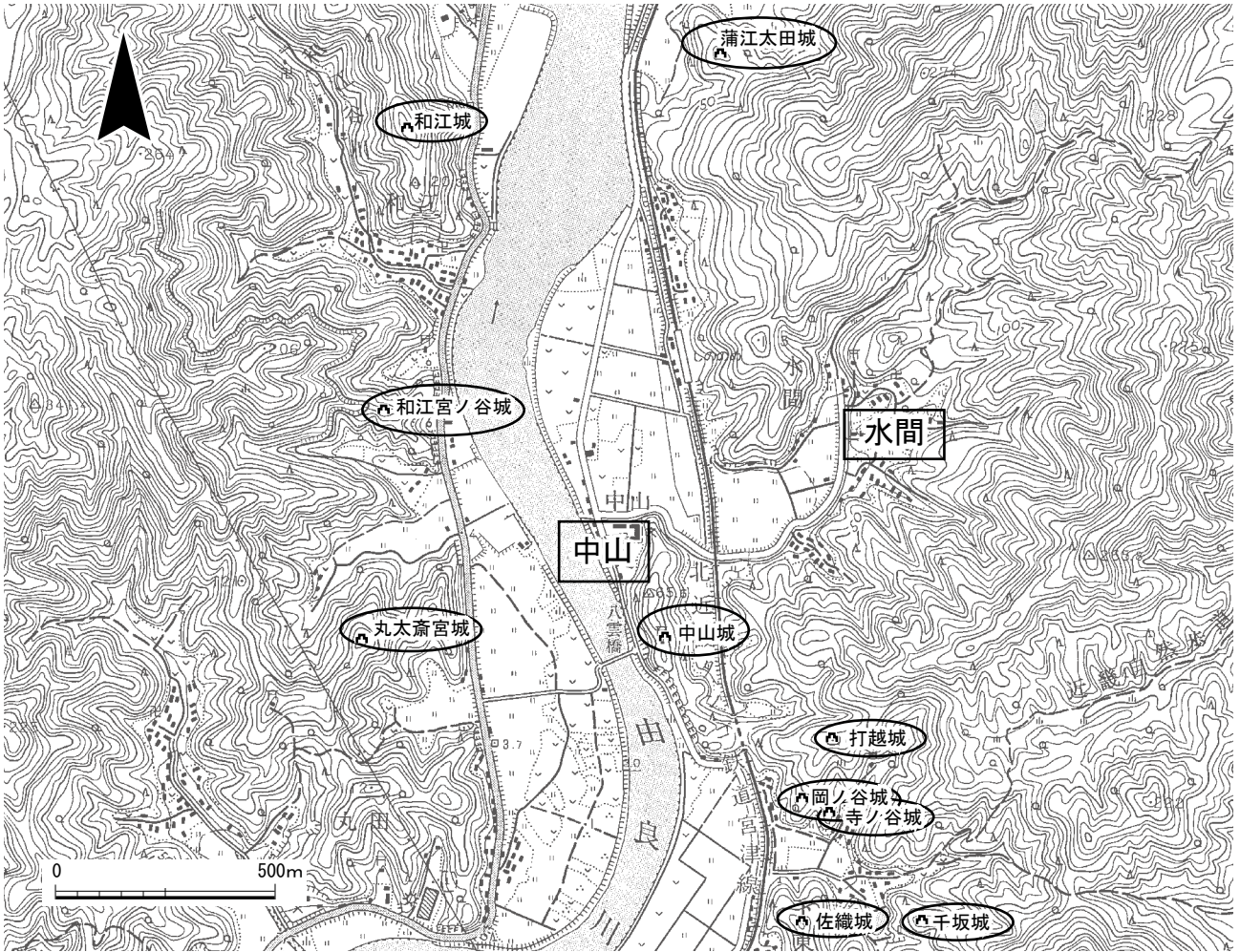


図2 水間周辺の山城

しかし、白井氏がいわばアウェイにあたる加佐郡で、館や居城をもたずいたとは考えにくいことです。

それでは、水間村のどこに拠点があったのでしょうか。現在発見されている山城の遺構の中で最も水間村に近いのは中山城です(図2参照)。

中山城とは

中山城は、京都府舞鶴市中山、由良川下流域にかかる八雲橋東詰めの崖上に位置する戦国時代の山城です。舞鶴市内には百以上の中世の山城のあとが残されていますが、そのなかでは比較的大きなものです。標高65メートル前後の尾根上に南北300メートルに曲輪群くるわが連なっています(図3参照)。

なお、現在の中山の地積図をみると、中山城の尾根より東側は水間の地籍となっており、西側は中山の地籍です。

宮津から舞鶴にむかう中世の陸路は、由良川左岸の和江から対岸の中山に渡河し、座尾

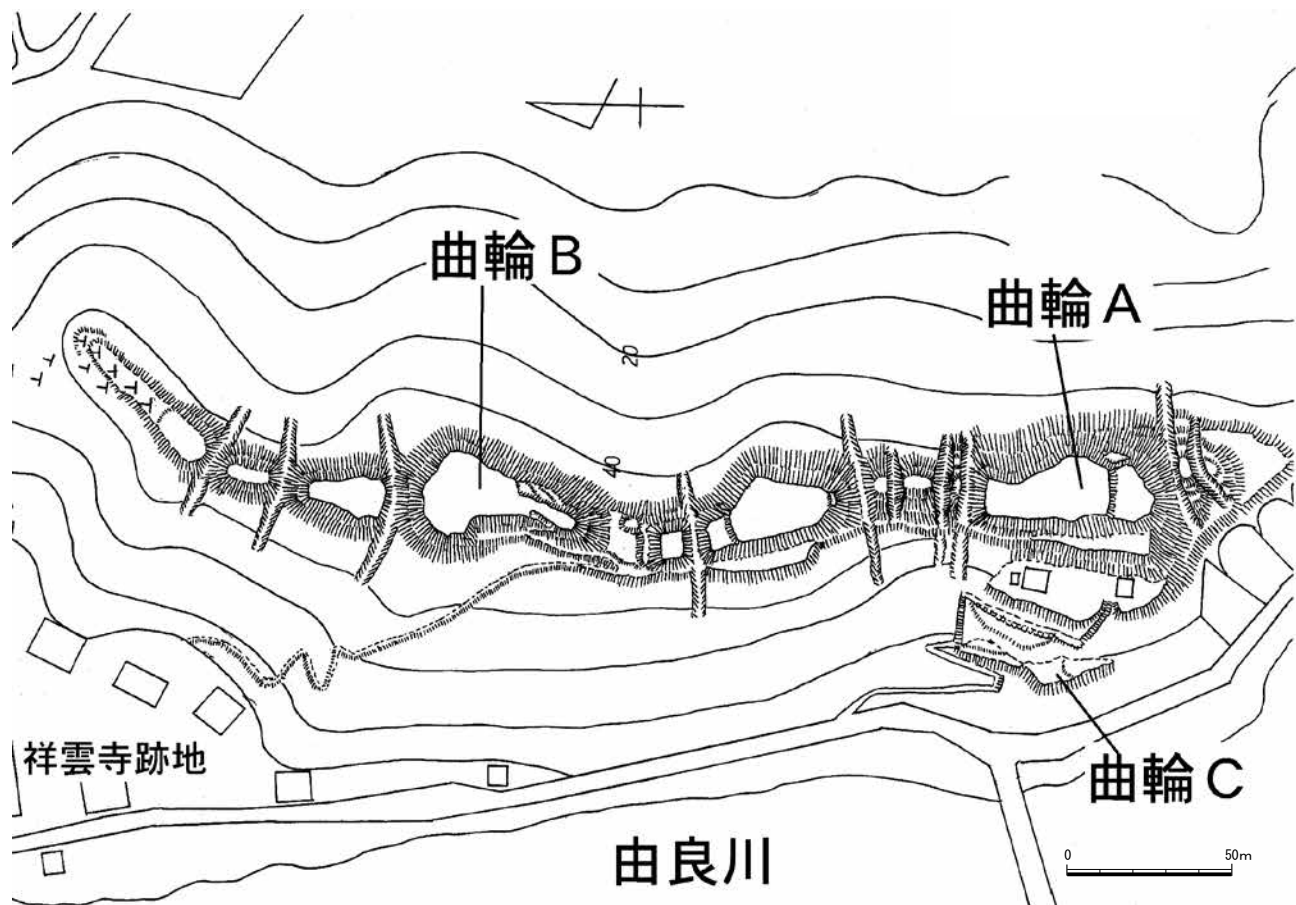


図3 中山城縄張図(高橋成計氏作成 一部発表者加筆)

峠または大船峠を越えて上福井に出て、愛宕山の鞍部を越えて西舞鶴の引土に出るルートであったと考えられています(図4参照)。したがって、中山は宮津と舞鶴を結ぶ陸路の要衝でした。中山城はこのようにきわめて重要な場所にあります。

水間村を知行した白井氏が加佐郡の支配を期待されていたとすると、中山城はうってつけの城ではないでしょうか。

しかし、中山城の城主を白井氏とする記録はありません。

中山城発掘調査

府道西神崎上東線の拡張工事にともない、平成21年11月から平成22年10月にかけて、京都府埋蔵文化財調査研究センターにより、中山城跡第5・6次発掘調査が実施され、その詳細な調査報告書が公開されています(京都府遺跡調査報告集第143冊)。この調査で発掘された部分は、城域の最南端の部分(中山城縄張り図の曲輪A、曲輪Cなど)だけで、全体に及ぶものではありませんが、多くの情報が得られています。以後、この発掘報告書に基づきながら白井氏と中山城の関係について考えてみたいと思います。

この城の登り口には掲示板ほそかわふじたかがあって、細川藤孝が天正7(1579)年に丹後攻めを行った際、

一色家家臣の沼田幸兵衛が主人を裏切り細川方についたこと。追いつめられた一色義道が自刃したことが書いてあります。これは「一色軍記」という後世の軍記物からの引用ですから、そのまま信用することはできませんが、だいたいこの時期には中山城はすでに使われていて、その後細川氏の持ち城となり、慶長5(1600)年の田辺籠城戦の時期に廃城となったものだろうと考えられていました。

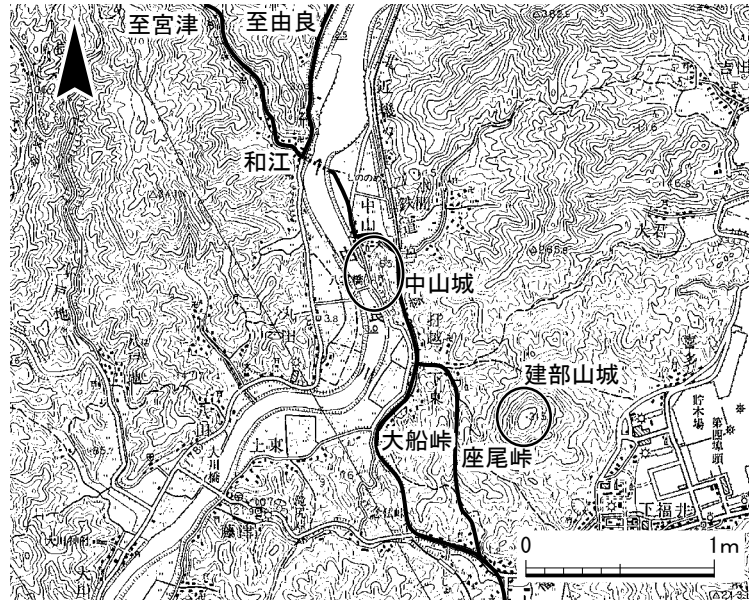


図4 宮津・舞鶴の街道

しかし、発掘報告書によると「城は1度造り替えられたことがわかる。古い時期を第1期、新しい時期を第2期とする」とし、その「まとめ」において、「第1期は16世紀第2四半期に相当することが判明した」「第2期は16世紀第4四半期に城が一度造り替えられ、郭を広げている」としています。

すなわち、曲輪が拡張された第2期は沼田幸兵衛や細川氏の時期と重なりますが、拡張前の第1期はそれよりも大きく遡ることが、今回の発掘によって明らかとなりました。第1期は16世紀第2四半期ですから、白井氏が水間村を支配していたと想定される時期(1520～1538年)に近づきます。

一方、発掘報告書では、「出土した土師器皿は16世紀前半でも終わりの時期であり、また、もっとも地域色が出る土師器皿は京都系であり、若狭の影響は認められない」としています。出土遺物の年代についても、発掘担当の方にお伺いしてみましたが、1540年代までしかさかのぼれないのではないかということでした。

白井家文書では、水間村の合戦があった天文7(1538)年以降、しばらく加佐郡関係の記事が現れません。少なくとも文書の上では、史料2の水間村での合戦のあと、永禄5(1562)年に加佐郡池之内瓦林掃部跡職が白井勝胤に新給されるまで、25年近い空白期間があります。

つまり出土遺物の年代から見る限り、今回発掘された曲輪の第1期は水間の戦い以後のものであり、白井氏の加佐郡での活動記録がなくなる時期のものであること、そして遺物には若狭の影響はなく、京都系の遺物が多いことから、報告書では第1期は一色氏との関わりのある勢力の構築であることが指摘されました。結局、今回発掘された曲輪は若狭白

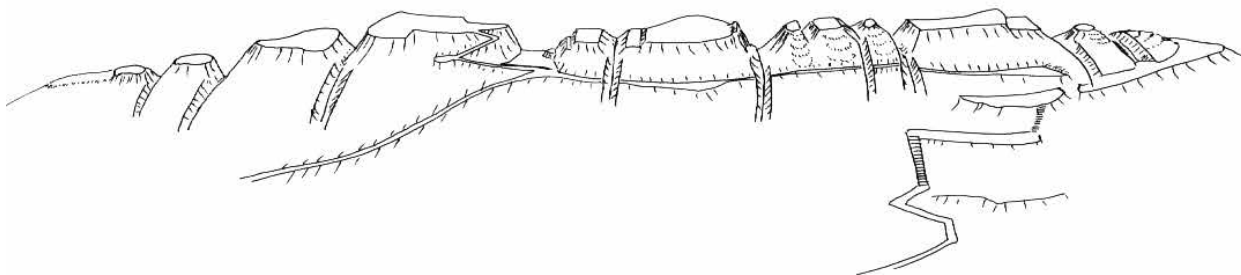


図5 中山城概念図(由良川方向から)

井氏の構築とは考えられないということになりました。

中山城の堀切の多さ

中山城縄張図を見ると、この山城は10個もの堀切で遮断されています。

堀切とは、山の尾根を攻めあがってくる敵をくい止めるために、曲輪の手前の尾根の一部を切り取り、曲輪側から堀切の向こうの敵を槍や弓矢や投石で攻めるパーツです。ですから、普通は城の端に作ればよいものです。舞鶴の山城の多くもそうです。

高橋成計氏作成の縄張図を三つあげました。これらは舞鶴市内では比較的大きな城です。志高城(図6)や余部上城(図7)のように、巨大な城では城域の中に堀切を作っている場合がありますが、中山城のように10個もの堀切で城を分断しているものはひとつもありません。これでは味方の移動が不便で仕方がありません。普段は木や竹の橋を堀切の上に架けて使って移動していたのかもしれませんが、それにしても異様な多さです。

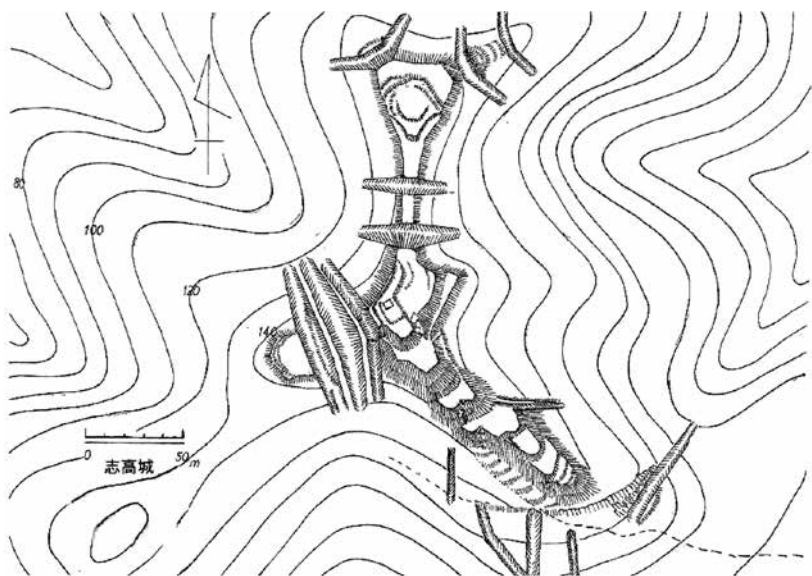


図6 志高城縄張図

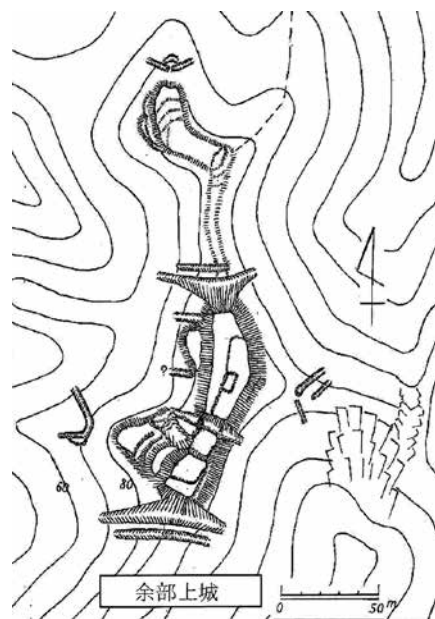


図7 余部城縄張図

これについては、発掘報告書でも触れているように、村田修三氏が中山城を調査して、「これらの郭は同時期に全部が完成したのではなく、必要に応じ順次築造されたものであろう」と評価されています。かつて今より小規模な「中山城」がつくられ、その後、何らかの理由で城を拡張することになり、既存の堀切の外側の尾根を削平して新たな曲輪をつくり、その先に新しい堀切をつくるという作業が繰り返され、古い堀切を埋め戻すことをしなかった結果、現在みられるような、異常に堀切が多い縄張りになったものと考えるのが妥当でしょう。つまり中山城は、長い年月を経て現在の姿になったといえます。

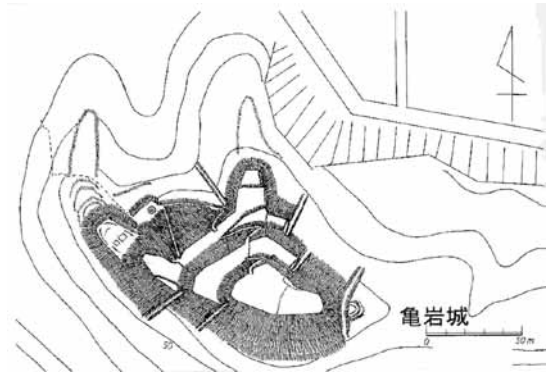


図8 亀岩城縄張図

それではもともとの「中山城」＝「原・中山城」はどこから始まったのでしょうか。

中山城の主郭は曲輪Bであると考えられます。その理由として、曲輪が最も高い位置にあること、虎口の作り方の複雑さ、城道などの縄張り上の特徴の他に、昭和20年まであった祥雲寺(由良川中学校跡地)が城主の館跡であった可能性が高いことがあげられます。祥雲寺の過去帳は現在は水間の即心寺で管理されていますが、この筆頭は「文禄二己年五月十一日亡ス 当寺開基祥雲院殿天林元清大居士 中山城主沼田幸兵衛君公」となっています。これは後世の書き込みである可能性もありますが、そうであったにせよ中山城の城主の菩提寺と伝承されてきたわけです。曲輪Bからの城道はこの敷地に続いていたようですし、城館跡が菩提寺になることはよくあります。

以上の理由から、曲輪Bが主郭であり「原・中山城」であるとすれば、今回発掘された最南端の曲輪Aは最終段階での築造と考えられます。この曲輪の第1期が1540年代というのですから、「原・中山城」の築城年代は、これを遡って考えることが可能となります。

したがって、天文7(1538)年の水間村での戦いの時点で、あるいは白井氏が水間村を拝領した永正17(1520)年の段階で「原・中山城」が存在していた可能性は十分あるのではないのでしょうか。

以上を整理すると、だいたい以下のように考えられます。

- ①未発掘の「原・中山城」……1540年代以前に築城……城主は不明(白井氏の可能性あり)
- ②発掘された曲輪Aの第1期……16世紀第2四半世紀に築城……城主は一色系
- ③発掘された曲輪Aの第2期……16世紀第4四半世紀に拡張……城主は細川系

白井氏の水間拝領の背景

次に永正17年に、白井氏が若狭から遠く離れた水間村に知行地を与えられた背景を考えてみます。

永正14(1517)年、白井氏は守護の武田元信からあわせて四通の感状を賜っています。
あまるべのさと 余部里、よっさわ 府中、つつみこや 竹野郡吉沢城、同郡堤籠屋城での軍忠に対するものです(図9参照)。永正17年の水間村の知行給付は、白井氏のこれら一連の活躍に対する論功行賞であった可能性が高いです。

永正14年といえば、舞鶴くらはしの庫橋城で戦いがあった年です。この戦いは、永正9(1512)年に丹後守護いっしきよしあり一色義有が病死したあと、後継者としていっしきくろう一色九郎を擁立した延永春信と、のぶなかはるのぶ一色義清を擁立した石川直経いっしきよしきよが対立して起こりました。有力国人の台頭によりお家騒動が起こった構図ですが、ここに若狭守護の武田元信が介入して石川直経を支援しました(図10参照)。戦況が不利になった延永春信は東舞鶴の庫橋城に籠城しました。延永氏は一色氏の守護代を任ずる家で、長禄3(1459)年の「丹後国惣田数帳」においては、延永さきょうのすけ左京亮は丹後国全体で198町あまりの所領を持ち、そのうち108町あまりは倉橋郷に所在しています。すなわち現在の東舞鶴地域にその所領の大半を有していました。石川直経との戦いで戦況が不利になった延永春信は、この倉橋郷を拠点として再起を図ったのでしょう。しかし、春信が籠城する庫橋城は、武田氏の要請で合力した越前勢によって落城しました。おそらく白井氏もこの戦いに連動する形で、若狭勢の一員として余部里、府中、吉沢城、堤籠屋城を転戦したのでしょう。

庫橋城の戦い以後の丹後の情勢については、『宮津市史通史編上巻』が「丹後国御檀家帳」

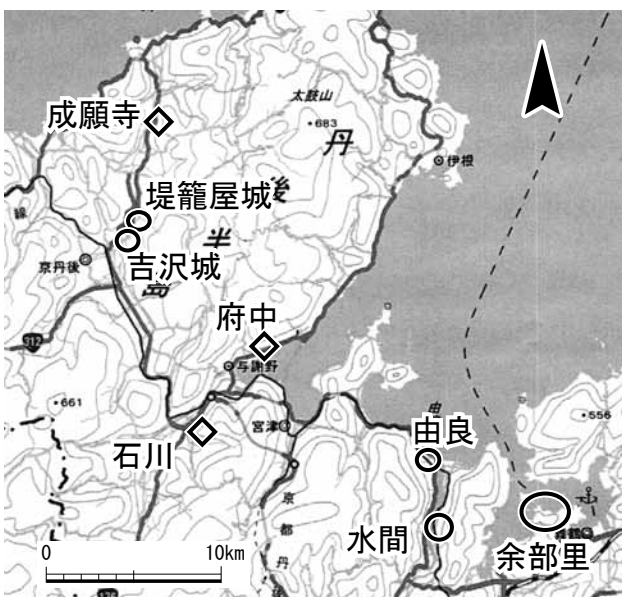


図9 白井氏関係、一色氏関係地図



図10 永正17年(1520)対立の構図

天文7(1538)年の記述にもとづいた推定を行っています。

「丹後国御檀家帳」では、丹後には「一色殿様」が三人おり、成願寺・府中・石川の三カ所にそれぞれ居住したと記していますが(図9参照)、『宮津市史』では、そのうち竹野郡成願寺の「一色殿様」は延永春信が擁立した一色九郎のことであると推測しています。次に「丹後国御檀家帳」では、府中にある「一色殿様」は「石川の御屋形様のご子息」であり、かつ「若狭武田殿の甥」と記していますが、このことから「宮津市史」は、①「石川の御屋形様」とは石川直経が擁立した一色義清自身であり、②義清は若狭の武田元光(武田元信の子)の姉妹と縁組を行い、その間に誕生した子を府中に住まわせて家督としました。③それが府中の「一色殿様」なのではないかと推定しています。

若狭勢の合力による石川直経の勝利→若狭武田氏と一色義清の縁組み→武田氏が白井氏へ水間村の知行権を付与。この過程から推定できるのは、武田氏が一色義清・石川直経を支援して延永春信を降伏させたことへの見返りとして、加佐郡は政略結婚とセットにして武田氏に割譲されたのではないかとということです。そして白井氏は、武田氏の加佐郡支配の最前線を守る役割を期待されつつ、水間村の知行を宛行われたと考えられます。最前線とは、とりあえずは由良川が想定できるでしょう。

中山城と「水間」

西津(福井県小浜市)は若狭武田氏が小浜に移る前の拠点があったところですが、ここはラグーンとなっていて、かなり大きな舟が入っていたことが明らかになっています。小字



図11 西津微高地形図(カシミール3Dで作成)

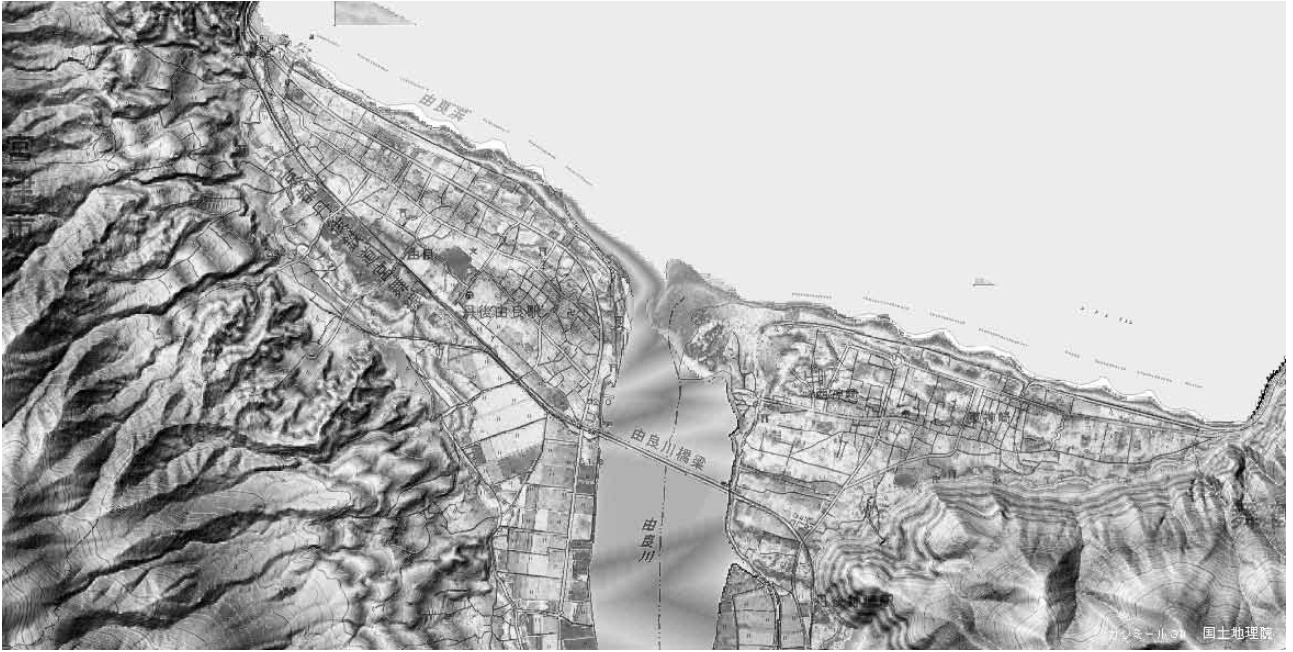


図12 由良微高地地形図(カシミール3Dで作成)

地名もそれを傍証しています。西津の現在の微高地地図(図11)を見るとその痕跡が見て取れます。

図12は宮津市由良の地図です。ここも西津とよく似た地形となっていて、ラグーンとなっていた可能性が高いです。由良はかつては由良千軒とよばれるほど廻船でにぎわったと近世の記録にあります。

最後に水間村周辺の微高地地図(図13)を見ると、よく似ていると思わずにはいられませ



図13 水間微高地地形図(カシミール3Dで作成)

ん。水間村は海ではなく由良川に面していますが、由良川が運んできた土砂が砂州をつくり、その内側に低地が広がっています。

こうして見たとき、「水間」という地名の由来を思わずにはいられません。

日本国語大辞典によると、「間」には、方言として「②海浜でしばらく舟をつないで泊る所。③舟を揚げて置く所。舟揚場。④暗礁でない海底の砂地。」の意味があります。また「川口を利用した川港と区別して、入江や島かげを利用した港をいう。日本海沿岸から北海道地方にかけて使われることが多い。」の「澗」と同義とされています。

ついでに、同じ辞書で「水間」の「水」を引いてみると、これは地球上に大量に存在する水一般とは特に区別して使う言葉でもあり、「川に流れているもの、またその流れ」という意味があげられています。ですから、「水間」は海の「間」とは区別して川の「間」という意味ではないでしょうか。こういうことを考えてみますと、水間村にもかつて入り江があったのではないかと思わざるをえません。ただし「神崎道」「中ノ坪」など、現在に残る水間の小字地名の検証がまだ必要です。

一方、余部里・府中・吉沢城・堤籠屋城という白井氏の合戦の場所をみてみると、彼らは主に舟を使って移動していたのではないかと想像してしまいます。また合戦も由良や水間のように、海浜や川辺で行っています。こういったことから、白井氏は若狭の水軍とコラボしながら行動していたか、彼ら自身が水軍であったのではないかと想像してしまいます。

中山城発掘調査報告書では、今回の発掘範囲の最も西側にある曲輪C(報告書の郭1-4)にあった「掘立柱建物6」が、かなり高い建物であったことを指摘しています。この建物は第1期のもので、第2期にはなかったそうですが、「この場所から由良川が一望できることから、見張りのための建物が想定できる」としています。つまり、一色系の段階では、この曲輪は由良川舟運を監視する機能を持っていたのだと考えられます。考えてみると、自前の舟を持たない城が由良川を監視したところで何の意味もありません。このことは、中山城が舟をもつ城であったことを傍証しているのではないのでしょうか。

中山城が宮津と舞鶴をつなぐ陸路の要衝として重要であったことはすでに申し上げましたが、それに加えて、舟と関わりのある山城であった可能性も、これからは考えていかなければならないと思います。

メモ



公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189